犬 ―その銘柄―

大野淳一 著

犬 ―その銘柄―

大野淳一 著

カラーブックス　3

まえがき

犬は人とともに生活し怜悧で従順で、しかも犬ほど人類社会に貢献している動物はない。しかし犬のすべてが役にたつから飼われているとは限らない。多くの愛犬家はこの愛すべき動物をただ愛するが故に飼育しているのである。イギリスの畜犬数は約六〇〇万頭と推定され、アメリカは凡そ二六〇〇万頭で人口七人当りにつき一頭の犬が飼育されていることになる。またわが国では近年三〇〇万頭に及ぶといわれている。

犬は家畜となったために形態の変化をきたし非常に多くの種類がある。それは犬が風土の影響をうけ易く、また時代の趣味嗜好の変移や、人為淘汰等により複雑となり、原始的なスタイルが著しく変貌をとげたからにほかならない。これらさまざまの銘柄の犬の魅力は優雅な姿態とともに美しい毛色にあり、またこのように変化に富んだ種類はカラー写真でないと個性が判然としない場合が多いのである。本書は外国にも少ないカラー写真による犬の小図鑑ともいうべきもので、わが国に多い犬種に重点をおき、その他は白黒の写真を使用したが犬にとって大切な表情を捉えることにも努めた。そして著者はそれぞれの犬種に簡単な解説を付し、後章に犬を正しく理解するに必要な項目を加え、犬に関心を抱かれる人々の参考に供した次第である。

犬種名　目次さくいん

☆この目次さくいんは利用の便をはかって
アイウエオ順に並べてあります。

1. プードルと女性　　POODLE

プードルは女性の犬である。特異な刈込みをするので，どんな不美人でもこの犬を連れて歩くと美人に見えるなどと悪口をいう男性もいるが，この写真のように美しい女性は益々美しく見えることはたしかである。頭部に黄色や空色のリボンを結んだり，宝石をちりばめた豪華な首輪をつけて，婦人のペットにふさわしい装いをする。

2　グレーハウンド

（原産地　エジプト）（用途　競走犬）

グレーハウンドは光の閃くが如く敏速で、燕のように優雅で、そしてイスラエル王ソロモンの如く賢明な犬だといわれるが、いかにも軽快でスピーディーなスタイルをしており、世界的に名高い犬種である。犬の歴史を繙くと、いつもまっ先に現われるのがグレーハウンドで、古代犬種に属し、西暦紀元前四〇〇〇年ごろのエジプト王の墓に、この犬の姿が彫刻されており、それ以降エジプトの古代壷や壁画に数多く現われてくる。もともとエジプトでは砂漠の小動物狩りに使用されていたものであるが、遠眼がよく利く上に脚力が速いので、英米ではドッグレースに用いられるようになった。ドッグレースは競馬と同じく犬券を買ってレースを楽しむもので、一般大衆にとってはなくてはならない娯楽となって深く根をおろしている。

体型は頭部は肉薄で口吻に向かって先細、頸は細く背は尾の方向に弓状に曲がり、全体が細っそりしていて筋肉質で無駄な肉がなく、いかにもスピード感に溢れている。体高は六六～六八c/m、体重は二七～三二Kg。

2.　グレーハウンド　GREYHOUND

3 バセンジー

（原産地　中央アフリカ）（用途　鳥猟犬）

この犬が英米に紹介されたのは比較的近年のことであるが、たいへん奇妙な習性を持っている。それは、この犬が「吠えない犬」として知られていることである。しかし、全く吠えない訳ではなく、大へん嬉しいときとか、また非常の事態には独特な吠声や唸り声を発するのである。嬉しい時にはククッと疳高く笑うような声と、ヨーデル調の地声から裏声へ、また裏声から地声に続くような声との中間の調子の奇妙な声を出す。普通の犬と違ってあまり番犬の用を果さないが猟欲が旺盛で、スピードがあり、またもの静かなので鳥猟に使用されている。

生れ故郷は奥コンゴの盆地辺で、また最もよいタイプの犬は動乱のベルギー領コンゴに多いといわれている。原産地は交通が不便であったため、数世紀にわたり本種の純粋性が保たれたものと考えられている。一名コンゴの藪犬（Congo Bush Dog）とも称される。

耳は前方に向かって直立していて、両耳の間が広く、皺が深くて独特な顔貌をしている。尾はくるりと背に巻いている。被毛は短く、毛色は咽喉と胸、四肢は白くその他は栗赤色である。体高は四〇cmぐらいで、体重は九～一〇Kg。

3. バセンジー　BASENJI

4. ボルゾイ　　BORZOI

ボルゾイは犬の世界でも最もノーブルで貴族的な犬種として知られている。被毛は長く絹糸のようで，ウェーブまたはカールしている。頭部と耳及び肢の前面の毛は短いが，その他は豊かで特に頸と尾と後軀の飾毛は長い。毛色は白地にビスケット色または赤褐色，黒などの斑があり非常に美しく印象的である。

ボルゾイ　　BORZOI

5. ダックスフンド（スムースヘアード）　DACHSHUND (SMOOTH-HAIRED)

6. ダックスフンド（ロングヘアード）　DACHSHUND (LONG-HAIRED)

4 ボルゾイ

（原産地　ロシア）（用途　観賞犬）

一名ルシアン・ウルフハウンドともいわれるが、その名称が示すように、かつてロシアで狼狩りに使用されたものである。狼狩りは第一次大戦前まではかなり大規模なもので、狼が現われたという知らせがあると猟人たちは騎馬で各々三頭のボルゾイを引連れてかけつけ、狼を包囲して倒すのである。犬が協同して狼を倒すには速力が等しいことが必要とされたといわれている。このようにボルゾイは非常に精悍で快速力の持主であった。しかもこの優美な姿態の犬はロシアの皇帝や貴族の間に寵愛され、ひところは皇帝の犬舎には沢山のボルゾイが飼育されていたことがある。現在では狼狩りに用いられることなく専ら美しい姿を楽しむ観賞犬としてもてはやされている。体高は七〇〜八〇cmもある大型犬である。

5 ダックスフンド（スムースヘアード）

（原産地　ドイツ）（用途　愛玩犬）

ダックスフンドというドイツ名は〝穴熊を狩る犬〟という意味である。この犬の祖先は多分バゼットハウンドの祖先と同一であろうと想像されているが、フランス革命以前に、中部ヨーロッパにダックスフンドと見做される犬が存在していたことは知られている。とにかくこの犬は数世紀の間、ドイツやオーストリアでは穴熊やその他の小害獣を地下の穴から追出して狩ることを得意としていた。穴熊はなかなか手強いため、それに対抗するには体力も強く、しかも精力的で嗅覚が鋭敏でなければならないので、以前は体重が一四〜一五Kgもあり、また穴にはいるに都合のよいように肢が短く胴はあたかも土管のように長くなり、まことにユーモラスで漫画的な恰好となった。

ダックスフンドは中世紀の狩猟書にも「ハウ

ンドの追跡能力とテリアの素質を有する犬」であると記されている通り、気質はたいへんに勇敢で、眼は小さく、耳は頬に沿って垂れ、頸は力強くて歯は鋭く、吠声は体に似合わず大きい。比較的大型のダックスフンドは狐狩りや小鹿を追跡して痛手を負わすのに効果があったが、さらに小型のミニァチュアはテンや野兎狩りに用いられた。二〇世紀になると兎狩りも放棄して、体重二〜二・五Kg、胸囲三〇cm以下となった。ダックスフンドは毛種によって三種に分かれているが、短毛のスムースへアードが最も一般的で、体重により各クラスに分かれる。イギリスでは五Kg以下のミニァチュアと五Kg以上のスタンダードに区別されている。

6　ダックスフンド（ロングへァード）

（原産地　ドイツ）（用途　愛玩犬）

スムース種にセターやスパニエルの血液を注入してできた長毛種である点が前者と異なる。

7　アフガンハウンド

（原産地　アフガニスタン）（用途　観賞犬）

アフガンハウンドは「ノアの方舟(はこぶね)の犬」だと言われているが、それはこの犬の恰好(かっこう)が舟のようだからだという説と、ノアの方舟に伴われて来たという伝説とがある。この犬は古い犬種の一つでアフガニスタンばかりでなく、北部インド地方にも見られるが、姿態は何んとなく近東風で、頭部に絹糸状の頂毛をもち、四肢の豊かな飾毛はあたかもカウボーイのズボンのようである。毛色は黄金色またはクリーム色。体高はおよそ七〇cm。

7. アフガンハウンド AFGHAN HOUND

ワイアヘアードのダックスフンドは，短毛のスムース種にスコティッシュ・テリアやアイリッシュ・テリアの血液を導入して作り出されたといわれる。堅い粗毛で覆われているので，いばらの叢を通るときは有利である。原産および用途は，スムース種とかわりない。

ダックスフンドは現在アメリカでは，アパートメント・サイズ　ドッグといわれて流行犬の一つに数えられているが，今日ではもはやこの犬を狩猟に用いることはなく，家庭の愛玩犬として，室内で多く飼育されている。

ダックスフンドの毛色は，黄褐色またはチョコレート色一色のものと，全体が黒色で褐色の斑のあるブラック・タンの二種が，もっとも一般的な毛色となっている。

8. ダックスフンド（ワイアヘアード）
DACHSHUND (WIRE-HAIRED)

9．ホイペット　　WHIPPET

ホイペットは，グレーハウンドを小型にしたようなレース用の軽快な犬である。この犬の名の起りは，猟野をかける姿があたかも馬を“鞭で飛ばす”（ Whipped up）ようであることに由来している。またの名をスナップ・ドッグともいうが，この犬がねずみやうさぎを追いかけて素早く噛む（Snap ）習性からつけられたあだ名である。

バゼットハウンドは古い犬種で，ヨーロッパ大陸は主としてフランスとベルギーに数世紀にわたって繁栄を続け，それらの国の王族によって庇護をうけてきた。鹿や野兎をほどよくゆっくりと追跡しながら狩ることを任務として発達してきたもので，肢が短く胴が太くて長いのは草木の密生した山野の猟に適し，落ついて的確に獲物を追跡しよく吠える。その吠声は音楽的で，声が深くて流れるように響き，他のハウンド種とは，全く違っている。頭は大きくてまるく，眼は沈んでいて赤い瞬膜を現わしている。体高は35cm，体重20kg内外である。

バゼットハウンド　BASSET HOUND

11. バゼットハウンド　BASSET HOUND

12. アメリカン・コッカー　スパニエル（黒）　AMERICAN COCKER SPANIEL (BLACK)

ハウンドという名称のついている犬は、主としてけもの狩りに用いられる犬種のことで、その種類はたいへん多い。またスパニエルと呼ばれるものは鳥猟犬で、その名称はスペインの犬の意味で、祖先はスペインから来たことを現わしている。

ところでスパニエル族の中で、この猟性を犠牲にして見た眼に美しい家庭犬が現われるようになった。それがアメリカン・コッカー　スパニエルで、ディズニーの天然色漫画映画「わんわん物語」でおなじみのヒロイン“レディー”ちゃんそのもので、わが国でもたちまち流行犬となった。

12 アメリカン・コッカースパニエル（黒）

（原産地　アメリカ）（用途　家庭犬）

アメリカン・コッカースパニエルはイングリッシュ・コッカースパニエルから改良作出されたものである。アメリカにコッカースパニエルが輸入されたのはかなり古く、一八五〇年ごろから一九〇〇年にかけては余り顧みられなかったが、ショウ・ドッグとして改良されてから注目を浴びるようになり、現在では猟野競技会はとも角として婦人子供のペットとして非常にもてはやされている。

実際アメリカン・コッカーはアメリカのみならず、近年世界的流行犬として最も著名で、原産国ではビーグルやボストン・テリアの人気を圧倒する勢で、わが国にも戦後輸入されてたちまち流行犬となった。この犬がこのように愛犬家に歓迎されるようになった大きな原因は、猟野におけるゲームの卓抜さよりも、小型でしかも気質が極めて温順であるばかりでなく、非常に美しい姿態に魅力が潜んでいて、近代的な感覚の横溢した新しい犬種であるといえるからであろう。この犬のファンシァーは愛くるしくパッチリした眼眸と美しい被毛、それに愉快な気質はたまらない魅力であるといっているが、美格にのみ捉われた結果ややシャイ（臆病）な犬が多く現われるようになったことは事実である。

イギリスのコッカーとアメリカン・タイプの異なる点はアメリカのものはサイズがやや小さく、口吻はやや短くて、頭蓋は円く両眼の間の彫りが深く、また毛色は多彩となった。毛色は次の四種に大別される。(A)黒　(B)黒以外の一色　(C)パーティ・カラー　(D)ブラック・タン、即ち黒地に眼の上と頬耳趾尾の下の一部に茶の斑のあるもの等である。被毛は絹糸状で黒色のものは特に長い。被毛はトリミングをして展覧会に出陳する。体高は三五〜三八cm。

13 ケースホンド

（原産地　オランダ）（用途　番犬）

ケースホンドはわが国ではキースホンドとも呼ばれている。かつて「大きなポメラニアン」または「狐犬」などとイギリスでは仇名されたことがあったが、ポメラニアンやスピッツなどと祖先を同じくするものと考えられる。

13．ケースホンド　KEESHOND

この犬は Dutch Barge Dog とも呼ばれるが、それは伝馬船の犬の意味で、オランダの運河に碇泊している船の番をしていたからだといわれている。ひところオランダのチーズホンドだなどとからかわれたこともあるが、ケースホンドと発音するのが正しい。オランダ語の Keesen は噛ることを意味している。

この犬について面白い話がある。オランダでは一七世紀に Kees Witt 氏と、一八世紀に Kees de Gyselaer 氏の二人の愛国者があり、ともにこの犬の愛好者であったのでケースホンドと呼ばれるようになったとのことである。ところで一八世紀の終りにオランダでは二つの政党が政争を起し人民党はこの犬を、オレンジ党はパグをマスコットとして大いに争ったが、当時人民党のことを人々はケーゼン（Keesen）といったという。被毛は厚くて長く、先端の黒いシルバーグレーで、体高は四三～四六㌢。

14. アメリカン・コッカー　スパニエル（パーテイカラー）
AMERICAN COCKER SPANIEL (PARTY COLOUR)

15. アメリカン・コッカー　スパニエル（バフ）
AMERICAN COCKER SPANIEL (BUFF)

イングリッシュ・セターは，わが国では単にセタまたはセッターとも呼ばれているが鳥猟犬界の古豪で，猟犬種の中でもイングリッシュポインターとともに最も優美な犬として世界的に名声を馳せているばかりでなく，家庭犬としてもまた傑出した犬種である。
猟犬としては，神経質で吠えるものは獲物を逃がすし，また臆病で鉄砲の音に驚くようなものも適さない。イングリッシュ・セターは，沈着冷静で，親しみやすい犬である。

16. イングリッシュ・セター　ENGLISH SETTER

14　アメリカン・コッカースパニエル（パーティ・カラー）

（原産地　アメリカ）（用途　家庭犬）

パーティ・カラーとは二種類の毛色が斑を構成して濃淡またはその大きさ、場所などが不規則に現われているもののことである。しかし、全一色の犬の胸や肢の白毛は斑色ではないので注意しなければならない。パーティ・カラーの代表的なものは、白地にレモン色から濃いマホガニー色までのいろいろな斑がある。

15　アメリカン・コッカースパニエル（バフ）

（原産地　アメリカ）（用途　家庭犬）

アメリカン・コッカーの毛色の黒以外の一色のものには、濃淡に関係なく、体全体が金茶または銀茶色のようなものを総括的にアスコブという。

アスコブの中に包含されるバフとは黄味の勝った赤黄色の一色のもののことである。

16　イングリッシュ・セター

（原産地　イギリス）（用途　鳥猟犬）

イングリッシュ・セターの起源はばく然としているが多分スパニエル族からでたものであろうと考えられる。一五世紀ごろまではスパニエルは鷹（たか）狩りに使われ獲物を追い立てる役目をしていたが、銃器の発達に伴い鉄砲打ちの前に立たされるようになったといわれている。古い記録によればノーザーバランドのダドレイ公爵がスパニエルを鷓鴣（しゃこ）を捕えるのに使用したが、これ等の犬は獲物の前方にセット即ち坐るのでセッティング・スパニエルと称された。これが今日のセターに固定されていると伝えられている。

セターは猟犬界の花形で、美しい絹糸状の被毛に覆われている。毛色は黒、白と黄褐色、白地にブルーの斑点が体一面に散在しているブルーベルトン、及びオレンジベルトン、黒と白、肝臓色と白等で体高は六一〜六九㎝である。

17　イングリッシュ・コッカースパニエル

（原産地　イギリス）（用途　鳥猟犬）

コッカースパニエルは、銃猟犬としてはスパニエル族の中でも最も小型である。その名称は山鴫（Wood-Cock）猟に使われたところから起ったものである。スパニエル種は非常に古くから英国に紹介されたスペイン系の猟犬種で、一三八七年ごろの記録に残っているが、水辺の猟にも、また陸猟にも優れていたのでフランスでも古くから使用されていた。コッカースパニエルの祖先はスパニエルの中でもかなり小型なものと想像されている。そしてこのように小型のコッカーは英国に一七世紀の初めごろから知られるようになり、著名な画家ヴァン・ダイク（Van Dyke）は一六二〇年ごろウェールスの皇太子と皇女と二頭の小型のスパニエルの絵を描いている。このころから大型のものはスプリンガーと呼ばれ、小型はコッカーと称されるようになり、今日のモダンタイプの犬に進化する基礎となったのである。コッカーは頭部は円く耳は大きく垂れ、肢は比較的短く、胴は頑丈で、毛色は白と黒の斑が最も普通で、その他ブラック・タン等がある。体高はおよそ四二㌢。

17.　イングリッシュ・コッカースパニエル
ENGLISH COCKER SPANIEL

18. イングリッシュ・ポインター　　ENGLISH POINTER

イングリッシュ・ポインターは，単にポインターといわれ，セターと並んで猟犬界の王者と伝えられるが，すらりと引しまったスタイルはまことに魅力的である。ポインターは歩調がスピーディーで持久力があり，そのうえ嗅覚がよく発達していて，たいへん聡明な犬であるがこの犬の最大の特徴は，猟場で捜索中に獲物を発見するとその前方に立止まり，確実にポイントすなわちそのありかを指示して主人の命令を待つことで、ポインターの名はこれに由来している。

ジャーマン・ポインターは，ドイツの代表的なポインターで，わが国では，独ポともいわれているが，古くからイングリッシュ・ポインターとともに日本の猟犬界に紹介されて人気をもっていた。戦後，どうしたわけかあまり振わないようである。
ジャーマン・ポインターの毛色は，イングリッシュ・ポインターと異なり，どことなく渋味があって貴族的なところがあり，聡明でしかもなかなかに活ぱつな気質を持っている。

19．ジャーマン・ポインター　GERMAN POINTER

18　ポインター

（原産地　イギリス）（用途　鳥猟犬）

イングリッシュ・ポインターは英国に作出されたものであるが、原種はスペインまたはポルトガルの地犬であって、その国々ではやはり早くから猟に使用されていたものである。スペインには一七〇四年より一三年まで王位継承戦争があり、これに参加した英国の軍人が持帰ったのが最初であるとされている。当時のポインターは今日のように洗練されたタイプではなく、いたって粗雑なものであったがグレー・ハウンドやフォックス・ハウンドの血液を入れて改良されたといわれる。ポインターの美しい毛色の斑もこの結果の産物である。被毛は短毛で、毛色は白色が優性で黒色または肝臓色の斑をもっている。ポインターは猟犬として卓越しているばかりでなく、性質は非常に温順なので家庭犬としても好適である。体高は六一～六四cm。

19　ジャーマン・ポインター

（原産地　ドイツ）（用途　鳥猟犬）

ドイツポインターの祖先もスパニッシュ・ポインターで、ドイツで改良作出されたものである。それはポイント（獲物のありかを指示すること）する鳥猟犬にドイツの狩猟家が大いに魅力を感じたからで、この犬にハウンドの血液を入れて、水陸両用のすばらしい猟犬を作り上げたのである。ドイツのポインターはポインターよりやや小さく、嗅覚が鋭敏で夜間でも獲物を追跡する能力があり、泳ぎが上手で、撃墜した獲物を運搬する巧みな素質を持っていて、持久力の強いことなどが特徴としてあげられている。そして鳥猟のみでなく兎や浣熊（あらいぐま）狩りや、また鹿を追跡させるためにも用いられるが、雉、雷鳥、鷓鴣（しゃこ）、山鴫（やましぎ）、鴨等の鳥猟に最も秀れている。被毛は短毛で、毛色は肝臓色の一色、肝臓色と白の斑点、肝臓色と白の小さなシミ、肝臓

色と白の葦毛等で肝臓色が特色となっている。尾は生後間もなく断尾をする習慣がある。体高は五三〜六三㌢。体重は二〇〜二七㎏。

20 アイリッシュ・セター

（原産地　イギリス）（用途　鳥猟犬）

アイルランド原産のセターで、その生地をとって名称としたものである。全身は赤味を帯びた金栗色の光沢に輝く美しい被毛に覆われている。鳥猟犬としては古くより性能を謳われてきたものであるが、イングリッシュ・セターくらいの大きさで、優雅なスタイルと華麗な毛色はまことに魅力に溢れているため、婦人の伴侶犬としても流行しつつある。

アイルランドでは毛色の赤色系の犬が多いが、このセターも古くはレッド・セターと称されたが、元来は単色でなかったもので、今日のような毛色が固定されたのは比較的近代のことであると考えられる。アイリッシュ・セターは猟欲が旺盛で、かつ活溌な犬である。従って猟野では活動の範囲が広く、またやや精悍な点がないでもないが、撃墜した獲物の運搬の巧みな点が賞揚されている。体高は牡六一〜六六㌢、牝は五〇〜六〇㌢で、体重は二七㎏ぐらい。

20. アイリッシュ・セター　IRISH SETTER

ドイツはワイマール地方の出身で，今から 130年ほど前には，ワイマールの貴族が独占的に所有していた門外不出の犬だったと伝えられている。そのためあまり世間には知られておらず，わが国には第二次大戦後，初めて紹介された。体型は従兄弟のジャーマン・ポインターに似てたいへん端麗な容姿をしており，鳥猟はもとより野猪や熊などの野獣狩りにも用いられるのが特徴である。気質は大膽で，しかも主人には愛情がこまやかで，飼主に喜ばれることを熱望するタイプの犬といえる。ワイマラナーの眼の色は，他の犬と比較すると非常に明るく，また被毛は短いがアメリカでは「灰色の聖霊」とよばれているように暗色のグレーまたはグレーの一色である。体高は56～66cm。
（原産地　ドイツ）　（用途　鳥獣狩猟犬）

21．ワイマラナー　WEIMARANA

22. セントバーナード　ST. BERNARD

セントバーナードは，すべての犬種の中でもっとも巨大な体構の持主である。雪の深いアルプスの山中で道に迷って遭難した旅人を救け出す救助犬として世界的に宣伝された犬で，どことなく中世の浪漫的なふん囲気を漂わせている。

22　セントバーナード

（原産地　スイス）（用途　救助犬）

スイスには大型犬が多いが、とりわけセントバーナードは巨大で体重は一一〇Kgにも達するものがあり子牛ぐらいのものも少なくない。この犬の祖先はチベットの古いマスチーフで、西暦紀元前にヨーロッパに渡ったものの子孫であろうと想像されている。そしてスイスのセントバーナード峠の付近で、長い歳月の間に今日のように独特な発達をとげたもののようで、西暦九六二年ごろそこの修道院でこの犬を救助犬として使用するようになったと伝えられている。この僧院はローマ法皇インノセント三世により海抜二四六七mのアルプス山中に建設せられたものである。

修道僧はこの剣阻なアルプスを通る旅人で道に迷い込んだり、或は雪中に倒れた人たちを救助して僧院に運んでいたが、いつか犬を助手に使うようになったのである。それまではこの犬は谷間の農場で働いていたもので、最初は牡だけが使用されたといわれている。英国の画家エドウィン・ランドシーアは吹雪の雪溜りの中で倒れている一人の旅人と頸にワインかラム酒のはいった小さな樽を結んだ二頭のセントバーナードを描いているが、一頭は僧院に知らせるために吠え、他の一頭は樽を旅人の顔に近づけ手首を舐めている絵は深い感銘を与えるばかりでなく、この犬の名声を世界的なものにした。

名匠の絵ばかりではなく、実際一八一五年に亡くなったバーリーと宿坊で呼ばれていた犬は最も有名で、この犬は余り大きくはなかったが典型的なセントバーナードで、四二人の遭難者を救助した。そして最後に狼とあやまられて射殺されたが、その功績は実に偉大なものである。バーリーの遺骸は剝製にされて現在もベルンの自然史博物館に収められている。

セントバーナードは体が非常に大きいが、気質は温和で子供にもよくなれ親しむ犬である。世界の注目の的となったアメリカのクリーブランドのレベッカという犬は、小鳥の雛や兎でも害することなく悠然として王者のごとき風格があったといわれている。本犬種には長毛種と短毛種がある。体重は普通七二〜九五Kgで、体高は六五〜七〇cm以上。

23. ゴードン セター GORDON SETTER

23 ゴードン・セター

(原産地 イギリス)(用途 鳥猟犬)

スコットランド産の唯一の鳥猟犬で、セター種の中ではもっとも大きい。毛色は黒色であるが黄褐色の斑が眼の上、口吻・咽喉・四肢・尾の裏等にはっきりと現われている。イングリッシュ・セターより口吻が太く、骨格もまた太いので一見重厚な感じのする犬である。性質は沈着で冷静、余り興奮することがなく、猟野においてはイングリッシュ・セターよりはゆっくりした歩様であるが聡明で忍耐強いといわれている。ゴードン・セターは毛色が黒地にタン(黄褐色)の斑のため十七世紀ごろはブラック・アンド・タン・セターとも称されたが一八二〇年ごろ、ゴードン公爵によりいろいろと改良されて今日のように優美な犬ができあがったので以後ゴードン・セターと呼ばれるようになった。体高は六二〜六六cm。

24．ドーベルマン　ピンシエル　　DOBERMAN PINSCHER

ドーベルマン・ピンシエルは，今から約60年ほど前にドイツで改良固定された新しい犬種である。ドイツでは1880年から1910年ごろにかけて，シエパードやボクサー，大型シュナウザー等が飛躍的発展をとげる基礎をつくった時代であるが，ドーベルマンもこれらドイツ原産の卓越した犬種と並んで世界の桧舞台に登場した。ドーベルマンの名は，この犬の作出者であるチュウリンゲンのルイス・ドーベルマン氏の名に由来するもので，同氏はテリア系統の上に優美で力強い作業犬を作り上げることに苦心した。チュウリンゲンの地犬にイギリスのテリアの血液が添加されたことは確実である。

被毛は短く，毛色は黒及び褐色に黄褐色の斑のあるブラック・タンである。尾は短く断尾される。体高60～70cm

（原産地　ドイツ）　　（用途　軍用・警察犬）

ブルドッグは英国の国犬といわれまた英国海軍のマスコットでもある。昔から英国人はジョンブルと仇名されているが，そういえば英国人気質とか魂のことを，たしかジョンブリズム(John-Bullism)といっているようである。ある人はブルドッグのあの大頭に海軍将官の帽子をのせ，そして上反りの大きなへの字形の口に葉巻をくわえさせると，チャーチルそっくりではないかといっている。

このように英国人とブルドッグとは深い因縁があるようだが，それにしてもどうしてこのようにブルドッグが好きであり，また誇りとしているかわからない。

25. ブルドッグ　BULLDOG

25 ブルドッグ

（原産地　イギリス）（用途　番犬）

ブルドッグはマスチーフ族に属する犬で、このタイプの初期の犬は七〇〇年以前から英国に存在していたことが認められている。然しブルドッグという名称が使われ出したのは一六三〇年ごろからである。ブルドッグの名はこの犬がブルバイチング（Bull-baiting）に使用されたからである。ブルバイチングとはブル即ち牡牛と犬を闘争させる極めて残忍な闘技で、当時は庶民の娯楽として白熱的に流行し一種のスポーツとみなされていた。

ブルバイチングはスタンフォードのワーレン卿が彼の秣場で二頭の犬と一頭の牡牛を闘わせたのが始まりであるとされているが、後には各地で開催されるようになったものである。一九世紀にはいるとブルバイチングはますます盛んになり、牡牛の鼻面に噛みつき闘争に勝ち抜くために犬の形態もその要求に従って変化した。もともとこの犬はそれほど短脚ではなかったが牛の角に突かれないように地低くなり、鼻が引込んでいるのは牛に噛みついたとき邪魔にならずに楽に呼吸ができるためである。また重心が前にあるのは噛みついた際に牛に振り飛ばされないようにつくったもので、相撲の立上り寸前のような恰好は全く筋肉の塊りそのもののようで弾力性を持っている。耳は噛み切られないように昔は短く断耳されていて、大きさも徐々に大きくなり、五五Kgに達するまでになった。

しかしブルバイチングは動物愛護の精神にもとるので、ついに一八三五年これを法律で禁止するようになった。ブルバイチングに終止符がうたれると同時にブルドッグは悲惨な闘争から解放されたが今度は失業犬の運命を担ったのである。そして一時は種の保存も危機に瀕したが、熱心な愛好家により兇悪な性質は次第に抜

き去られ、体型も小型となり温順な親しみ易い番犬に生まれ変り、今日では顔貌に似合わぬやさしい犬である。しかし、ブルはよいがイビキをかくのが玉に疵だという人もある。被毛は短く毛色は赤味がかった褐色の虎毛や白、斑、黄金色などいろいろあり、体重は二三Kgぐらい。

26 マスチーフ

（原産地　イギリス）（用途　番犬）

マスチーフの祖先は古代種であるチベットのマスチーフが、ペルシア、アッシリア、バビロニア、エジプトを経て紀元前五五年ごろイギリスに渡ったものと考えられている。古代ローマ朝時代からマスチーフは闘犬種として用いられ、三頭のマスチーフと熊と、四頭のマスチーフとライオンとが闘うに充分なほど強力であるといわれた時代があった。それほど巨大で獰猛なこの犬が英国では猟場の番犬の役を果したりまた軍用犬として使用された歴史がある。しかし現代のマスチーフは気質はいたって温和でしかも王者のような風格を備え、忠実な番犬として大邸宅に飼育されている。頭部は大きくて角型、顔面は幅広く、頸は太く胸は広く尾は垂れている。被毛は短く毛色は顔面が黒く、その他は黄色がかった金色である。体重は七五Kg、体高はおよそ七五cm。

26. マスチーフ　MASTIFF

ピレニアン・マウンテインドッグ

PYRENEAN MOUNTAIN DOG

27. ブルマスチーフ　BULLMASTIFF

28．ピレニアン・マウンティン・ドッグ　PYRENEAN MOUNTAIN DOG

27　ブルマスチーフ

（原産地　イギリス）（用途　番犬）

ブルドッグとマスチーフの混血によりできた犬種なのでブルマスチーフと呼ばれている。ブルドッグは牡牛と、そしてマスチーフは熊と闘うベアバイチング（**Bear-baiting**）に使われていたので、従ってブルマスチーフは両者の強力さを兼備する非常に精力的な犬である。マスチーフは一時は巨大な体構であったが一八九〇年ごろより幾分小型のものが好まれるようになり、巨大タイプは衰微するようになった。かつてはこの犬は猟場の番人に飼育されて番犬となっていたものである。一九世紀になってから、マスチーフとブルドッグとの混血が行われたが、その結果マスチーフより小型でしかも敏活で静かな犬が作出された。

マスチーフは猟場をうろつき廻る密猟者を捜索して、彼等を襲撃するまでは静かにしているのでたいへんに重宝がられたものである。このいわば猟場の番人の気まぐれの二犬種の混血をそののち真似をするものが続出し〝番人の夜犬〟（**Keeper's Night Dog**）と名付けられたが、相当に気質の荒い犬であった。

一九〇〇年にはいるとブルマスチーフは展覧会にも現われるようになったが、有名なメトロポリタン・ドッグショウで口輪を嵌（は）めなくともよいブルマスチーフに一ポンドの賞金を贈ると申出た人があったが、口輪なしに出陳させる人がなかったと当時の雑誌は報じている。モダン・ブルマスチーフはすっかり外貌が整えられて着実に発展の一路をたどっているが、サイズは中型犬よりやや大きく、落付いていて非常に強力である。頭部は大きくて幅広く四角型でその円周はほぼ体高に等しく、唇は垂唇があり肩は筋肉逞（たくま）しく、腰は幅広く、尾は先細で長い。毛色は淡黄褐色が普通で、体高は六一〜六八㎝。

28 ピレニアン・マウンティン・ドッグ

(原産地　スペインとフランスの辺境地方)
(用途　番犬)

アメリカではこの犬のことをグレート・ピレニーズと呼んでいるが、英国ではピレニアン・マウンティン・ドッグといっている。犬種としてはマスチーフ族に属しピレニアン・マスチーフと称されたこともある、この犬の歴史は非常に古く祖先は中央アジアに源を発するが、多分フェニキア人が通商のため航海した際にスペインに渡ったか、あるいはアリアン民族の遊牧民がヨーロッパに移動した際に、この犬を連れていったのではないかとも想像されている。そのいずれにしても中世紀までフランスとスペインの国境のピレネーの高い山嶽地帯に長い間孤立して天候や環境の影響をうけ、独自の発達をとげしかも純血が保たれてきたものであろう。

一六七五年フランスのルイ一四世はこの犬を宮廷犬に採用したので一躍名声を馳せた。悠容せまらざる風格をした、この巨大な美しい絵のような姿態にいまさらのように魅せられた貴族社会の人々は垂涎措くあたわず、熱心にこの犬を捜し求めたといわれている。

ピレニアン・マウンティン・ドッグはまた有能な作業犬として知られている。フランスやスペインでは小農夫の牧羊作業に従事しているが、冬季は食物に餓えた狼が山麓地方まで荒し廻るので家畜の群を保護するために使用された。また狼ばかりでなく熊の害も防がねばならず、よく闘ったのでピレニアン・ベアハウンドまたはピレニアン・ウルフハウンドとも称されたことがある。性質は極めて温順で威厳があり、頭部は大きく頸は太い。軀幹は頑丈で腰部は幅が広く後肢には狼爪をもっている。被毛は厚くて毛色は白の一色か、白に茶色の斑のあるものなどで、体高は牡六八〜八一cm、牝六三〜七三cm。

グレートデン（ファウン）　GREAT DANE (FAWN)

塑像的でいかにも男性的な感覚のあふれたグレートデンの外貌は，非常にすっきりしていて，少しもごつごつしたところがない。頭部は長くて幅はせまく，眼の下部は美しく形造られていて，上品な表情をしている。耳は付根が高くて，両耳の間隔は離れすぎず，断耳したものは高く直立しているが，断耳していないものは頬にそって前方に垂れている。

29．グレートデン（ファウン）　GREAT DANE (FAWN)

29 グレートデン（ファウン）

（原産地　ドイツまたはデンマーク）（用途番犬）

グレートデンは貴族的な外貌のなかに威厳と優美さを兼備するアポロのような犬である。およそ世界に数多くの犬種が存在するがグレートデンは最も体高が高くて、巨大犬タイプに属し体型はまことに均整がよくとれ力強く、活溌で勇気に富み親しみ易く、かつ信頼するにたる犬である。

グーレトデンの原産地はドイツかデンマークか明らかでなく、古くから議論の的になっている。英国に紹介されたのはそう古いことではないが、この犬の風貌が大いに好まれたものである。この犬の名称は昔のフランスの呼称であったグラン・ダノワ（grand Danois）を飜訳してつけたもので、即ち大きなデンマーク人（Big Danish）の意味である。グレートデンは英国では「ドイツの野猪狩犬」とも称されたが、ドイツでは Deutsche Dagge 即ち「ドイツのマスチーフ」と呼ばれている。この犬の祖先について古代種であることを主張する人々は紀元前およそ三〇〇〇年のエジプトの記念碑に、よく似た犬が彫刻されてあることを指摘している。系統的にはマスチーフ族に属し、古い英国のマスチーフの子孫ではないかとも考えられている。とにかくグレートデンは新しい犬種ではなく、過去四〇〇年ばかりの間にはっきりしたタイプが培われて来たものである。ドイツでは野猪狩りに用いられていたので性質が勇猛、単独で猪を倒したものであるが、そのころは今日のように優美なものではなかった。毛色により五種類に分類されるが、ファウンは黄金色から濃金色までであって、口吻に黒いマスクを持っているものをいう。胸と趾に白斑のあるものは好まれない。体高は牡は七六㎝、牝は七一㎝以上。

30　ウエルシュ・コルギー（カーデガン）

（原産地　イギリス）（用途　番犬）

ウエルシュ・コルギーにはカーデガンとペンブローク（Pembroke）の二種があり、カーデガンの方が古いとされている。この犬は紀元前に赤い髪の背の高いケルト族が、中央ヨーロッパからウエールスに移動して来た時に連れて来てカーデガンシャイアの高地に住むようになったと伝えられている。

30.　ウエルシュ・コルギー（カーデガン）
WELSH CORGI (CARDIGAN)

またペンブロークは英国のヘンリー一世の誘いによってウエールスに移住したフランダースの綴織の織工たちが遙々イギリス海峡を越えて一緒に連れて来た犬がそれであるともいわれている。この二種は大きさも恰好もたいへんによく似ているが、両者を比較するとカーデガンは尾が長くて耳の先端が円く、ペンブロークは尾が短く耳の先端は尖っていて、体高はやや高くて毛色は頗る華麗である。しかし両者は以前に混血が行われた形跡があり、近似性はその結果であろう。コルギーの名は言語学者の説によると、ウイスキーなどと同じように、現在英国に残っているケルト語の一つで犬のことを意味している。この犬は胴が長いが機敏で顔は狐に似ている。毛色は茶、黒と黄褐色、黒と白、白とブルーの斑等で、体高は三〇％ぐらいである。

ハルクインは英語のハーレクイン（Harlequin）のことである。意味は仮面をつけ斑色の服を着た古代ローマの喜劇役者や、現代のパントマイムの主役者のことである。また単に斑色の意味にも使われている。グレートデンの場合はもちろん後者で、白地に黒の斑のある毛色のことをいっている。しかし，グレートデン以外は，斑色を一般にパーティ・カラー（Party-colour）といっている。

31．グレートデン（ハルクイン）
GREAT DANE (HARLEQUIN)

32. シエパード　GERMAN SHEPHERD DOG

軍用犬の代表として，シエパードは最も典型的な犬種である。犬を戦争に用いた歴史は非常に古く，ギリシアの史家ヘロドタス(Herodotus) もこれについて述べているが，主として陣地の警備や通信連絡に，また負傷兵の救出に利用していた。本格的に利用されだしたのは，第一次大戦からのことであるが，今日のエレクトロニクス時代突入とともに，その利用範囲は狭められて以前ほどではなくなっている。

31 グレートデン（ハルクィン）

（原産地　ドイツまたはデンマーク）（用途　番犬）

グレートデンは毛色により五種に分類されること及びファウンについては既に述べたので、ここではファウン以外の毛色について述べる。

ブリンドル……地色は薄い黄金色から濃い黄金色までであって、常に濃い黒の縞が横切っている。地色が濃く縞が濃いものほど好まれる。

ハルクイン……地色は純白で、不規則の黒斑が体全体に程よく分布しているもので頸は白い方がよく、黒斑は大き過ぎず、また小斑点がダルメーシァンのように点在するのはよくない。

ブルー……真の鉄紺色でなければならない。黒色または黄金色、鼠色のさし毛があってはならない。

ブラック……光沢のある黒色。

グレートデンの耳はドイツやアメリカでは断耳をして頭上に高くスマートに直立しているが、英国では施術が犬に苦痛を与えるから、法律により断耳を禁止しているため自然の垂耳となっている。そこに国民性の相違が見られる。

32 シェパード

（原産地　ドイツ）（用途　軍用、警察、牧羊、盲導犬）

シェパードは、もはやドイツの犬ではなくて世界の犬だといわれるが、わが国でもこの犬種ほど高度に発達をとげた外国犬種はかつてないばかりか、質的にも量的にも決して諸外国に劣るものではない。シェパードの名は英語の羊飼いまたは牧羊者のことであって、正しくはドイツ・シェパード犬と称するのである。その名が示すとおりシェパードは過去においてはババリアやチューリンゲン地方に牧羊犬として使用されていたものであるが、この犬の使役分野を開拓するため計画的に繁殖され出したのは一八九

○年ごろのことである。牧羊犬時代のシェパードは耳の垂れたものや立ったもの、巻尾や長毛やまたむく毛のものがあり、体高もまちまちで、毛色も種々雑多であった。この犬が今日有能な使役犬として人類社会に貢献するようになったのはドイツ・シェパード犬の父といわれるマイエル氏や退役騎兵大尉のシュテファニッツ氏の努力によるところが多いのであるが、本質的には牧羊犬は元より、警察犬・軍用犬に適する偉大な素質を持っていたからであるといえよう。

全くシェパードの使役分野は広範囲で、前記の外に盲導犬、輓曳犬、救護犬、警備犬、家庭犬としても用いられ理想的な万能犬だといわれるのも、まことに当然のことといえる。

西ドイツでは現在でも約四万頭のシェパードが牧羊犬として作業に従事している。

わが国におけるシェパードの黄金時代は昭和一二年ごろで、当時は軍用犬といえばシェパード、シェパードといえば軍用犬を想起させるほど全国的に普及し、ドイツからの輸入犬も頂点に達した感があった。これと併行して訓練士が養成され各地に訓練所が設置された。やがて軍部によるシェパードの購買が行われ、前線に送られた犬の活躍ぶりが、新聞紙上に数限りなく報道されたものである。

敗戦後は残存犬は少なくなり、一時衰微したが年とともに輸入犬の数を増して健全な発達をとげ、新しい時代の要求に従って警察犬、家庭犬、工場の警備犬としての任務に服している。またわずかながら自衛隊にも勤務するようになり、東南アジア方面へも輸出されるようになった。一見狼のような精悍さを持っているが知的で主人によくなつき命令に服従し、訓練することによって犬が持つ最高の能力を発揮できるといわれている。体高は牡六〇～六五㎝、牝五五～六〇㎝。

33．ダルメーシアン　DALMATIAN

ダルメーシアンは白地に黒、または肝臓色の美しい斑点が、あたかも碁石のように全身に散っている。ポインターくらいの大きさの犬で、一度この犬を見た人は恐らく生涯忘れることができないほど印象的な犬である。昔はジプシーにかわいがられて、彼等とともにヨーロッパ各地に流浪の旅をつづけ、結局たどりついたところがベニスの東岸、現在のユーゴスラビアのダルメーシア地方で、そこを故郷とするようになった。

ボクサーとはもちろん拳闘家のことである。その名の由来については定説はないが、拳闘家とまちがえられることが多いので、わざわざボクサードッグと呼ばなければならないこともある。

34．ボクサー BOXER

33 ダルメーシアン

（原産地　ユーゴスラヴィア）（用途　番犬）

ダルメーシアンはイストリアン・ポインターの子孫で後に少しグレートデンの血液が添加されてできたといわれるが明瞭でない。

この犬は一名馬車犬とも称されるが、馬車犬といっても馬車を曳く訳でなく、馬車の後部について馬と歩調を合わせてついて歩くだけであるが、長距離の道のりでも平気で難なく走破することができる。フランスでは一六七〇年ごろから旅をするには馬車を使用したが、途中で追剝の危険から護るためにダルメーシアンが、このように数頭ついて走るようになったもので、非常に重大な任務を持っていた。その後英国に紹介されたが、やはりこの目的で長途の旅行の安全のために使用された。ダルメーシアンは頗る多才な犬である。猟犬としても、また牧羊犬としてもよく働くし、歩哨犬の経験もあり、サーカスの舞台で脚光を浴びたこともある。この犬の小犬は生後間もなくは純白であるが二、三週間を経過すると徐々に斑点が現われ始め成長するに従ってはっきりして来る。体高は四八～五八㌢。

34 ボクサー

（原産地　ドイツ）（用途　番犬、警察犬）

ボクサーは過去一〇〇年ばかりの間にドイツで完成された犬であるが、現在ではドイツはもとより、アメリカでも最も人気のある犬種の一つである。そればかりでなく、フランス、オランダ、オーストリア等の各国でも人気のある犬で、軍用犬、警察犬、盲導犬、家庭犬としても稀に見るよい資質を備えている。

ボクサーは四肢がすっきりしていて、強力な体構と特異な顔貌をしているが、堅固な美しさと秀れたセンスのよくマッチした中型の犬で、性質は思慮深くてしかも親しみ易く、聰明で従

順である。その名称については諸説あるが、英国人は拳闘家に似ているからだと説き、また祖先のボクスル（Boxl）という犬から由来するとも伝えられている。ボクサーはたしかにブルドッグやボストン・テリアに似ているが英国のブルドッグとグレートデンの交配によってできたともいわれている。ドイツで近代的繁殖の行われるようになったのは一八九〇年ごろからで、第一次大戦にはシェパードとともに約六〇頭のボクサーが赤十字の仕事に従い声価を高めた。また、この犬はアメリカに渡って非常に進歩したといわれるが顔貌や毛色はたしかに立派になったといえるだろう。ボクサーの顔は鬼のようだといわれるが気質は至ってやさしい。毛色にはファウンとブリンドルの二種があり、ブリンドルは金色がかった地色に黒い縞があり、どちらも顔面に黒のマスクが絶対に要求される。体高は牡五六〜六一㌢、牝五三〜五八㌢。

35 オールド イングリッシュ シープドッグ

（原産地　イギリス）（用途　牧羊犬）

体全体がむく毛に覆われていて頭から垂れ下がった毛で顔面が見えない。毛色はグレーまたはブルーで白の斑のあるものもある。名前ほど古い犬種ではないが牧羊犬として知られ、この犬の特徴であるファンタジックな被毛は羊毛と同じく紡ぐことができてホームスパンの服や手袋が作られる。体高は五三〜五八㌢。

35．オールド　イングリッシュ　シープドッグ
OLD ENGLISH SHEEPDOG

36．コリー（セーブル）　COLLIE（SABLE）

37．コリー（トライカラー）　COLLIE (TRICOLOUR)

「名犬ラッシー」や「名犬ラッド」の物語で，世界の少年少女に親しまれているコリーは，スコットランドの北部を生れ故郷とするたいへん美しい聡明な犬である。この地方は，冬の寒さがきびしいので，自然の要求に従ってコリーの被毛は長くて厚く豊かになったものとおもわれる。このような自然の条件が恍惚とするようなエレガントな姿態を生んだといえる。

36 コリー（セーブル）
37 コリー（トライカラー）

（原産地　イギリス）（用途　牧羊、家庭犬）

コリーには短毛のスムース・コリーと長毛のラフ・コリーの二種類あるが、わが国ではラフ・コリーのことを単にコリーと称している。元来は牧羊犬であるが、現在では家庭犬として広く飼育され世界各国に普及している。コリーの歴史は非常に古く、スコットランドの北部の高地やイングランドに牧畜が盛んになるにつれてその牧羊犬としての素質が認められ、これらの地方で盛んに使用されるようになった純然たる作業犬である。当時のコリーは頭部の幅が広くて短くサイズも比較的小型であったが、一八六〇年にバーミンガムの展覧会に出陳されるようになってから急速に見た眼に美しいショウ・ドッグに改良されて体型が固定されるようになったものである。コリーの今日あるのは長い間の選択繁殖の賜物であって一八八六年ごろには現在の大きさに達したと伝えられている。この犬の名称はスコットランドで黒い顔と黒い肢をした羊をコレー（Colley）といったことによるもので、これは古語で黒いという意味である。このことが顔と肢の黒い牧羊犬に転訛してコリーとなったといわれている。

コリーは脚力が敏捷で地勢のよくない牧場でも卓抜した作業に適し、朝は羊を牧舎から連れ出し夕には連れ戻り、その間彼等が散らないように監視し狼のような害敵からよく守ってやるなど、天賦の牧羊犬である。ビクトリア女王はスコットランドを訪れたとき、たまたま一目コリーを見て、その優雅なスタイルに魅せられ直ちに連れ帰って寵愛された。それが一般に知れると、大きな刺戟となって愛犬家の注目するところとなり流行の魁（さきがけ）となったのである。コリーは毛色により四種に分けられる。即ちセーブル

（薄い金色からマホガニー色まであり普通胸、頸、肢、趾、尾の先に白斑がある）トライカラー（黒色が多くて白斑はセーブル同様で褐色が頭部と肢のあたりにある）ブルーマール（大理石色で青白色に黒い斑のあるもの）ホワイト（白地にセーブルかトライの斑あるもの）等である。
体高は牡六一〜六六cm、牝五六〜六一cm。

38. チャウ・チャウ　CHOW CHOW

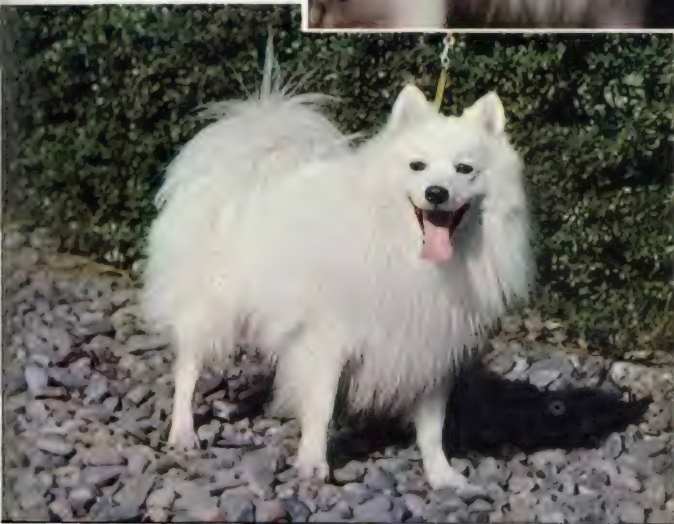
38 チャウ・チャウ

（原産地　中国）（用途　番犬、愛玩犬）

チャウ・チャウが他の犬と異なる点は「黒い舌の犬」または「黒い口の犬」といわれるようにブルーブラックの舌を持っていることである。また「熊犬」などとも称されるように被毛が非常に厚く毛皮の代用となる。また表情が独特な〝苦(にが)い顔〟をしているので有名であるのみならず、この犬は昔食用犬として飼育された歴史を持っている珍しい犬といわねばならない。以前は猟犬であったが、現在では家庭の番犬または愛玩犬として飼育されるようになった。

広東が生れ故郷のこの犬が東印度商会の船で英国に渡ったのは一七八九年のことで、この珍しい犬は非常に人気をよび、以後世界的に知られるようになった。チャウ・チャウの尾は日本犬のように巻いていて、毛色は一色で黒、褐色、ブルー、金色等がある。体高は約五〇cm。

スピッツ，スピッツと普通にいっているが，この語源はドイツ語のシュピッツ(Spitz)から転訛したもので，とがったことを意味している。山の尖端なども俗にシュピッツと称している。この犬の耳の先端が尖っていて，口吻が尖っていることなどは，名前の由来をなるほどとうなずかせる。

39．スピッツ　SPITZ

40. ワイアヘアード・フオックス テリア　　WIRE-HAIRED FOX TERRIER

フォックス・テリアは，テリア界の紳士といわれ，貴族的ふん囲気をただよわせている。そのスマートさは抜群で，世界的に普及している英国の代表的なテリアである。フォックス・テリアには，被毛の長さによりワイアヘアード（粗毛で針金状）とスムース（短毛）の二種あるが，いずれもその名の示すとおり一世紀前までは，狐狩りに用いられたものである。

39 スピッツ

（原産地　ドイツ）（用途　番犬、愛玩犬）

スピッツは純白の優雅な長毛に覆われ、小さな立耳と豊かな飾毛をもつやや小型の犬で、わが国全土に広く分布している流行犬である。この犬が普及したのは戦後のことで、他の犬種を圧倒している。その理由として価格が比較的低廉なことおよび体質の強壮であることなどが挙げられるが、スピッツそれ自体が大衆の好みにピッタリ合った魅力を持っているからにほかならない。スピッツの祖先はケースホンドと同じく北極地方の犬で、徐々に南下して各地に拡がり各々独自の発達をとげたものと考えられる。日本のスピッツの系統は判然としていないが、多分ドイツの白色スピッツの子孫であろうと想像されている。純白が要求されビスケットやレモン色の斑のあるものや赤い鼻色は忌避される。体高は牡三四〜三六㌢、牝三一〜三三㌢。

40 ワイアヘアード・フォックステリア

（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

フォックス・テリアは穴の中に潜む小害獣の駆除犬で特に狐を追い出し、これを捕捉することを得意とし、その能力は高く評価されていた。時にはこの犬よりも大きなフォックス・ハウンドと共にこの仕事に従事した。フォックス・テリアが穴から狐を追出すと脚の速いフォックス・ハウンドがこれを捕え、穴に隠れればまたテリアが攻撃をかける協同作業が効果的であった。

このテリアが改良されてスマートな愛玩犬に生れ変ったのは一八八〇年ごろからのことで、たちまちにして世界的に名声を博し、各国の展覧会に現われて人気を蒐めている。性質は小型の体軀に活力横溢しそのうえ聰明で、陽気で明るく愛嬌に富んでいるのでだれにでもかわいがられる。わが国でも最も人気のあるテリアの一つで、展覧会にはトリミングといって被毛を刈

って出陣される習慣がある。被毛は堅くバリバリしていて、白地にタン（褐色）と黒の斑があり、口吻が長くて頸の伸びた短胴の犬がモダンタイプとされている。体高は三七〜三九㌢。

41 ケリーブルー・テリア

（原産地　イギリス）（用途　家庭犬）

アイルランドのケリー州の犬なのでその名が与えられている。被毛は柔らかくて波状になり非常に豊富で、毛色は独特なスモーク・ブルーである。ケリー州では牧場の番をしたり、また川鼠を追って水を潜ったりしたが、もともとは貛狩り犬として秀れた能力を誇った犬種である。

テリアとしては、少し大きい方で闘争心は強いが、子供や主人を信頼することは大変なものである。起源は詳らかでないが、ベドリントン・テリアと関係が深いと想像される。この犬の身上はなんといっても美しい被毛にあり他のテリアと同様にトリミングを施されるが、前額部より口吻にかけて特異な風貌をもっていて、この犬の愛好者を喜ばせている。ケリーブルー・テリアの小犬は生れた時に黒色のものが多く一八カ月未満までは暗いブルーかどうかわからない場合がよくある。

体高は牡四四〜五一㌢、牝四三〜四八㌢。

41. ケリーブルーテリア　KERRY BLUE TERRIER

42. ヨークシャー　テリア　　YORKSHIRE TERRIER

エアデール　テリア　　AIREDALE TERRIER

ヨークシャ・テリアは、テリア種のなかでも最も小さくて，愛玩犬のうちでも小さな部類に属している。この犬は約百年ほど前に人為的に作り出されたもので，祖先には各種のテリアが関係しているものと考えられる。ヨークシャ 地方にできたのでその名が与えられているが，ここの職人たちが外套のポケットにはいるような捕鼡犬を作るのが目的だったと伝えられている。

ヨークシャ・テリアは，眼で話す犬といわれるほどで，表情の魅力的な明るい気質が喜ばれ，だれにでも好感を抱かせずにはおかない。婦人の抱き犬として人気があり，子どものよい遊び相手ともなる。被毛はかなり長く，毛色は頭部と四肢が黄褐色でその他はブルーがかっている。体重は2.5 ～3.5 kg，体高は20cmあまり。

エアデール・テリアは，テリア種のなかで最も大型で，テリアの王様といわれているほど容姿が端麗で気品に富み，その上に落付きと威厳とをそなえている。しかも親しみを感じさせるのはこの犬の特性といえよう。

43.エアデール テリア AIREDALE TERRIER

43　エアデール・テリア

（原産地　イギリス）（用途　警察、軍用、家庭犬）

エアデール・テリアは今から九〇年ほど前に英国最大の伯爵領ヨークシャーの平原を流れるオウス河の支流エア川のオトレー付近に作出されたものである。当時エア地方の渓谷にカワウソ狩に熱心な人々がラッテング・テリアという捕鼠犬を飼育していたが、これに猟性を高めるためにオッター・ハウンドというカワウソ狩専門の犬を交配し、さらにブルテリアや他のテリアの血液を混じえてエアデール・テリアが誕生したといわれる。その名称はエア渓谷のテリアという意味である。

エアデール・テリアは万能犬といわれるほど優れた性能をもち、軍用、警察犬としては訓練が容易でドイツ、イギリス、インドを初めとして、わが国でも戦時中に活躍して秀れた成果を上げた。猟犬としての性能は先天的に卓越し、水に陸に使用されて猛獣すら恐れずピューマに立向う唯一の犬種であるとセオドール・ルーズベルトをして讃嘆せしめたほどである。また家庭犬としてはまことに理想的な犬種で、その性質は怜悧で聡明な判断力をもちかつ温順で、ジステンパーに対する抵抗力が強く、気候の影響を受けることの少ない強壮な体質の持主である。エアデール・テリアは狂燥性がなく落着いていて低い独特の吠声はオッター・ハウンドから継承したものだといわれるが人々の神経を刺戟しないことはたしかである。

エアデール・テリアの体型はフォックス・テリアに似て体高と体長の等しい方型体で、被毛は堅くバリバリしている。毛色は背部が鞍掛けのように黒色の外は黄褐色で耳はやや濃厚である。他のテリアと同じくトリミングを行い、尾は適当に断尾される。体高五七〜六〇㌢。

44 トーイ・マンチェスター・テリア

（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

トーイ マンチェスター・テリアは、英国ではミニアチュア ブラック アンド タン テリア（Miniature Black and Tan Terrier）とも称されている。この犬は古い英国のテリアの子孫で、たいへん小型で毛色は祖先そのものの、黒と褐色で繻子（しゅす）のように光沢のある短毛の、見るからに繊細（せんさい）な感じを与える犬である。

44．トーイ マンチェスター テリア
TOY MANCHESTER TERRIER

トーイ マンチェスター テリアは全く偶然の機会に生れたもので、祖先のマンチェスター・テリアの一胎仔のうちわずか一頭のみが大きく育ち、他は小型にとどまったので、その繁殖家はこの小型に興味を持って飼育しているうちに、他の愛犬家の注目するところとなり、やがて小型のマンチェスター・テリアが流行するようになったといわれる。一八七〇年ごろはロンドンでは体重が二・三～三・二Kgの捕鼠犬として名高かったが、ますます小型のものが人気を呼び一時は一・一Kgくらいのものが作出されたが、チワワと同じく極端に小さいものは虚弱なので今日では大きい方のマンチェスター・テリアが九Kgであるのに対しトーイは五・五Kg以下三・二Kgぐらいまでである。この犬は自然の直立耳で大きいのが特に目立つ特徴である。

45. スコティッシュ　テリア　SCOTTISH TERRIER (BLACK)

46. スコティッシュ　テリア SCOTTISH TERRIER (RED-BLINDLE)

47. ボストン テリア BOSTON TERRIER

ボストンテリアはアメリカの代表的犬種で，ボストン市あたりで作出されたのでその名がつけられている。この犬は1880年代にアメリカに輸入されたブルドッグと虎毛のブルテリアとの混血によって生れた。
現在の洗練されたボストンテリアは，主人に非常に忠実で，愛情こまやか，その上きびきびと活動的である。毛色はタキシードかテールコートを着たようで，断耳されて細く直立した耳はアメリカ人の好みにあう。体重により15ポンド(6.8kg)まで,15ポンド〜20ポンド(6.8kg〜9.0kg)，20ポンド〜25ポンド(9.0〜11.3kg)の3つのクラスに分けられているが，一般には大型のものは番犬として，また小型のものは愛玩犬として飼育されている。（原産地 アメリカ） （用途 番犬・愛玩犬）

45　スコティッシュ・テリア（黒）
46　スコティッシュ・テリア（ブリンドル）

（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

スコットランドの土着犬で、元来は岩山の穴猟に使われたものであって、頑丈な体軀と短い肢をもち、性質は忍耐強く大へん勇敢だった。彼等は主人である貧しい農夫や妻子たちの心からの友であり、留守番はもちろんのこと、穀物なども害獣からよく守ったものである。

　他の郷土を同じくするテリアに魁けてスコットランドのテリアの名を第一番に与えられたこの犬は、イングランド産のフォックス・テリアと同様に英語を話す国民ばかりでなく、世界的に人気を集めているテリアで、わが国にもこの犬のファンが多い。その容姿はなんとなく禅味を帯び、野武士然として落付いていて、あたかも墨絵に描かれたもののような感が深く渋いという一語につきる。これに反してフォックス・テリアの派手な毛色とスマートな容姿には都会的な感覚が横溢しているといえるだろう。しかしスコティッシュ・テリア特有のキャラクターはまた格別味わいが深く、怜悧聡明さをよく表現する眼には近代的な感覚の閃きを充分感じさせられる。

　本犬種が人気を集めている理由はその他に、この犬が手ごろの大きさであることや、体質が強壮であることだけでなく、重要なことは小型犬でありながら大型犬の個性を持っていることで、その吠声は体に似合わず太く、だれにでも愛撫を求めるような犬ではない。現今では専ら愛玩犬として飼育されるが家庭の番犬の用も果し、大きな顔に髭を生やし小さな耳をピンと立てて胸を張った地低い姿は、なんといっても愛嬌があり、思わず人をして引きつける点は他に類例がない。婦人子供のアクセサリーにこの犬が最も多く用いられている。被毛は粗毛で堅く

毛色は黒色、ブリンドル（黒地に銀色の刺毛のあるシルバーブリンドルに、茶色の刺毛のあるレッドブリンドル等）、小麦色などがある。体重は八〜一〇Kg。体高は二三〜二八cm。

48 ブルテリア

（原産地　イギリス）（用途　番犬）

白い騎士と称せられているブルテリアは一八世紀の中ごろブルドッグの闘争性に、テリアの活潑敏捷性を結合させる目的で、既に絶滅したホワイト・テリアにブルドッグを交配して作出されたものである。ブルテリアの頭部は卵型で眼は小さく、表情は腕白そうで、胸は深くて幅が広く尾はやや細くて先細である。被毛は短くて純白で美しい光沢をもっている。この純白の毛色はバーミンガムのヒンクス一家の並々ならぬ努力により改良されたもので、それまでは毛色は区々であった。しかし近親繁殖を繰返したので一時は聾(つんぼ)犬が多く出て問題になったことがあるけれども、近来はこのような現象はなくなったといってよい。英国の作家ウォルター・スコットは一八三二年亡くなったが、彼は自分の飼った犬の中でブルテリアが最も大胆で聰明な犬であったと記している。ブルテリアは均整のとれた優美な番犬である。体重二五〜二七Kg。体高四八〜五六cm。

48. ブルテリア　BULL TERRIER

モルチーズ　　MALTESE

モルチーズは非常に古い犬種で3000年も前から知られている。地中海はマルタ島の産で，古代より犬の貴族であったらしく，ギリシアの陶器芸術を代表する壷や水がめには，紀元前 500年ごろより美しいモルチーズの絵が描かれている。ローマ帝国時代の貴婦人たちの寵愛をうけ，現在と同じ名称で呼ばれていた。
イギリスに最初に輸入されたのは，ヘンリー八世の時代で，エリザベス朝時代には気取った家庭婦人たちの適当な遊び相手としてもてはやされていた。その後1800年ごろになると，この犬は英国やヨーロッパ各地で非常に人気が高まり，婦人の抱き犬として有名になった。長い純白の被毛があまりにも美しくて，初めて見た人は大きなショックを受けるというので一名ショックドッグといわれたことすらある。

49．モルチーズ　MALTESE

49 モルチーズ

（原産地　マルタ島）（用途　愛玩犬）

モルチーズの原産地はマルタ島であるとされている。しかしアドリア海のメリタ島だという説もあり祖先の島はやや明確を欠いているがポメラニア地方のポメラニアンのようにマルタ島のモルチーズが最も一般的となっている。しかし古くからヨーロッパ各地に渡り子孫は各国に繁栄しているが今日のマルタ島にはその姿は見られなくなっている。英国では一八八〇年ごろまでは白熱的流行を見せたものであるが、オランダやドイツの秀れた犬が多く輸入され、それ等のものによって現在の英国のモルチーズの基礎が築かれた。

一九二九年イタリーの皇太子は英国からすばらしいモルチーズを求めて婚約者のベルギーの皇女に贈られたことがある。モルチーズは形態が小さく、美しい雪のように純白の長い被毛に覆われていて気品に富みモルチーズ・テリアと称されたこともあるが、テリアではなくスパニエルと近親関係にあるものと考えられる。性質は極めて聰明で温順、婦人や子供のペットとして室内で飼育されている。抱き犬としては重過ぎない軽い小さなものが最も喜ばれる。したがって体重は三・二Kg以下で小さいものほどよく、一・四Kg以下が理想とされている。この犬の大きな特徴は純白の被毛にあり、長くてまっすぐな絹糸状の被毛が体の両側に平均に垂れていて特に頭部から顔面に垂れる被毛で眼が見えない程である。それでリボンを頭の上に結んでやることもある。なおこの犬には下毛が全くないのが特異な点である。

50 ウエストハイランド　ホワイト・テリア

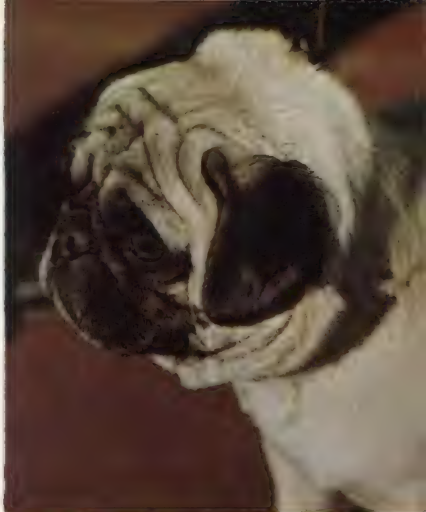
（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

スコットランドのウエストハイランド地方の

犬である。スコットランドにはこの外にスコティッシュ・テリアやケアン・テリアなどがいるがいずれも同一の祖先から発したものと想像される。この犬はやさしい表情に溢れ、純白の被毛に覆われたまことに清楚な感じのする美しい小型犬である。有名なスコッチウイスキーのトレードマークにスコティッシュ・テリアと共に使われている犬で、毛色がブラック・アンド・ホワイトの対照の妙だけではなくて、いずれもスコットランドの原産であることがウイスキーと共通するものがある。

50. ウエストハイランド　ホワイト・テリア
WESTHIGHLAND WHITE TERRIER

　古くからケアン・テリアの変種だとみなされていたことも事実で、このことについて一挿話がある。昔ケアン・テリアが白色または毛色の淡い子犬を産むのを極端に嫌う迷信が西ハイランド地方にあり、これを除去し淘汰する習慣があった。当時ポルタロッチに住むマルコム大佐はこの白色ケアンに興味を持ち飼育したのが始まりで、しだいに白色が増加して行きついにホワイトケアンはポルタロッチ・テリアと呼ばれるようになったが、これが今日のウエストハイランド　ホワイト・テリアと関係が深いというのである。この犬は抱き犬としても人気がある。体重は五・五〜八・三Kg。体高二五〜二八cm。

パグの顔は口吻がたいへん短く皺が多いので、ふしくれだった拳のようだとか、踏みつけられた顔のようだといわれているが、明らかにマスチーフ族の特徴が現われている。パグとはラテン語で拳形のことをいうが、この犬の頭部の形が拳に似ていることによるのだろう。

51. パ グ　PUG

52. ペキニーズ　PEKINGESE

ペキニーズ　PEKINGESE

51　パ　グ

（原産地　中国）（用途　愛玩犬）

パグは英国やフランスでニックネームをカーリン（Carlin）と呼ばれている。これは約二〇〇年前パグを愛したペルシャ人の俳優カーリン氏に由来するものである。パグは中国から直接東印度商会の手によりオランダ、フランス、イタリーなどを経てヨーロッパ大陸に紹介され、英国に渡ったものと信じられている。英国では時に〃ダッチ・ドッグ〃と称されて、多くの人々はパグをオランダの犬だと思い込んでいたこともある。

頭が大きくて、口吻が非常につまって短く、尾を背に巻いた大部分の愛玩犬は、支那大陸が母国で、これが中国の犬の大きな特徴とされている。ただオランダの商人は中国と盛んに交易を行ったので、英国にパグを最初に紹介したのはオランダ人だった可能性は考えられる。

英国王ウイリアム三世はパグが輸入された最も初期の愛好家で、パグが貴族社会に第一歩をしるしたのは実にこのときである。後にビクトリア女王も一頭所有され御自慢だったと伝えられている。

一七九八年のロンドン・タイムズの遺失物拾得欄に明るい毛色のパグのことが掲載されているのは興味深い。また英国では約一〇〇年ほど前までは断耳をする習慣があり、いちじるしく美観を損ねていたといわれる。パグは小型で親しみのある犬で、被毛が短いので他の愛玩犬のように手がかからなくて飼い易いが本質的には室内犬でたいへんに寒がりである。毛色はシルバー、黄杏色、黄金色などで顔面は黒マスクで濃いほどよい。また後頭部より尾まで黒い線が拡がっている。眼は非常に大きくて突出していて円型で、表情は何か悩んでいるようである。体重は六・三〜八・一kg。

52 ペキニーズ

(原産地　中国)(用途　愛玩犬)

ペキニーズの祖先は日本の狆と同じく、恐らく西域を通過して支那大陸に渡ったヨーロッパの小型犬で、中国の都で独特な発達をとげたものであろう。ペキニーズは宮廷内で宦官の厳重な監督の下に繁殖させられ、神聖な寺院の中に住んでいて、子犬は奴隷の娘により育てられていた。好ましくないものが産れると直ちに淘汰されたし、またこの犬を盗んだものは死刑にされたとのことである。

ペキニーズはこのように門外不出の珍しい愛玩動物として大せつに育てられ皇帝の独占物であった。一〇〇〇年も前から皇帝の寵を受けたこの犬は、皇帝が亡くなった時には墓に遺骸を曳いて行く戒律があり、一九一一年に西大后が葬られた時は〃モータン〃というペキニーズが柩の綱を曳いたと伝えられている。英国にペキニーズが最初に現われたのは一八六〇年にイギリスが中国に出兵したときのことである。北京城の宮殿に突入した英国兵は撤退を急いで置去られた皇帝のペットである五頭の世にも稀な美しい小型犬を発見した。これが英国に持帰られその中の一頭がビクトリア女王に献上され一八七二年までウィンザー城に生存した。この犬は〃ローティ〃と名付けられ、黄金色と白の毛色で非常に小さくて歩兵の帽子くらいであったと伝えられている。アメリカに紹介されたのはかなり遅く、英国のペキニーズが渡ったのであるが急速に普及し、アメリカの愛玩犬界の王座にのしあがった感がある。ペキニーズは玩具のライオンに似ていて小さく、如何にも風変りの個性を持っている。勇気と大胆さと自尊心が強く威厳がある。毛色には褐色、黄金色、黒、黒と黄金色、白と斑などがあるが顔面は黒い。体重は六・三Kg以下で三・六Kgぐらいが最もよい。

53. ケアン　テリア　　CAIRN TERRIER

スコットランドのテリアの特徴は、いずれも肢が短く粗毛で覆われ小型である点で、ケアンテリアも同様である。このテリアは勇敢な気質で極めて頑健なので、たぬきや狐の害を除くために飼育されていた。鋭い嗅覚をはたらかせながら岩穴や積石の穴にはいり、すみついている害獣を追出す仕事に従事していたので、ケアン（積石の意）の名が与えられたものである。かつてカワウソ狩りにも使われたことがあり、また番犬としても大いに役立っている。体高はおよそ25cm。
（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

プードルは大きさにより三種に分けられる。スタンダード・プードル（体高38cm以上），ミニアチュア・プードル（体高38cm以下25cm以上），トーイ・プードル（体高25cm以下）である。ライオンのような形に刈込みをする習慣があり，婦人の伴侶犬または愛玩犬として名声をはせている。婦人の髪型のプードル・カットはこの犬の頂毛をまねたものである。

54．プードル（ミニアチュア）　POODLE（MINIATURE）

54　プードル

（原産地　ヨーロッパ）（用途　家庭、愛玩犬）

プードルは一般にフレンチ・プードルといわれフランスの犬のように思われているが、原産地はどうやらドイツらしく、またロシアであるとの説もある。プードルという語源はドイツで古くからプーデル（Pudel）と呼ばれていたことに由来する。スタンダード・プードルが原型犬であって、他の二種は単に矮小化されたものに過ぎない。テリアと違った特別の刈込みをするがドイツの画家デュラー（一四七一〜一五二八年）は現在流行している刈込まれたプードルを既に描いている。しかしこの風変りな刈込みを見た一般民衆は非常に驚いて、怪奇な風貌を嘲笑したとのことである。またプードルは犬のおどけ者で、犬の世界の道化役者だという人もあるが、もしこの刈込みを抑制したならプードルのおもしろさは、全くなくなってしまうともいわれている。

プードルは松露（しょうろ）（きのこの一種）狩りの犬として英国に知られていて、ダックスフンドとコンビで使用されたものである。プードルが嗅いで松露のありかを発見するとダックスフンドが掘り出すという案配で、夜間に掘出すために白色のプードルが必要になったという説もある。

プードルは非常に聰明な犬だといわれるが、この犬はサーカスにとっても大きな魅力で、英国にはベルギーから密輸されていた。アン女王は数頭のトーイ・プードルを寵愛されたが、犬のサーカスで〝小犬の踊り〟を御覧になってよく訓練されて音楽に合わせてダンスをするこの犬に興味を持たれたのが最初である。プードルの被毛は非常に豊富で、長さは平均していて数本が絡（から）んだ巻毛である。毛色はすべて一色で、白、ブルー、黒、褐色、杏色等があり、胸や趾先に白斑があってはならない。

55 ベドリントン・テリア

（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

イングランドの北部のベドリントン地方の猟犬で、兎、アナグマ、カワウソ、イタチ猟は勿論のこと狐狩りにも使用されていた。

最初は肢が短かったが、ホイペットの交配によって長くなった。そして昔は諸国を旅行するジプシーや鋳物師に可愛がられていたものである。ベドリントン・テリアの起源ははっきりしていないが、この犬の最大の特徴は他のテリアに見ることのできない長い垂耳と頭部に頂毛をもっていることである。この犬のトリミングはあたかも小羊のように上品に仕上げられ、頂毛をつけて気取って歩く姿は見る人をして忘れ難い印象を与える。

性質は愛情が細やかで、体型のスマートな犬で現在はほとんど狩猟に使われることがなく、家庭犬または愛玩犬として飼育されている。体質は強壮で主人には忠実でまことに申分ないが他の犬同志では嫉妬深く喧嘩好きであるといわれる。フォックステリアほどの大きさで、背がやや曲っていて尾は先細で彎刀状である。被毛は生綿のようでブルー、肝臓色、砂色、ブルーと黄褐色等である。体高は三八～四〇㎝。

55.　ドリントン・テリア
BEDLINGTON TERRIER

56. ミニアチュア　シュナウザー　　MINIATURE SCHNUZER

シュナウザーの名は，この犬の口吻部に口髭のあることに由来するもので，口髭のある人のことをドイツ語でシュナウッツということからきている。中型サイズのシュナウザーとアッフエン・ピンシャーという小型の犬との異種交配の結果，ミニアチュアができたものである。この犬はたいへん快活で，家庭のペットとしての適応性を十分に備えているので愛好家に喜ばれている。被毛はかたくて手触りは粗く，トリミングをして美しく仕上げることがある。毛色は胡椒色や岩塩色，またこれらの混合した明るい色や暗色のものなどがある。尾は生後まもなく断尾する。体高は30～35cm。（原産地　ドイツ）　（用途　愛玩犬）

チワワ　CHIHUAHUA

チワワは世界のあらゆる犬種のなかで最も小さく，体重わずかに 500g で手のひらにのるようなポケット犬が現われたこともある。あまりに小型だと虚弱なので，1 kgから 2 kgのものが理想的な大きさとされている。メキシコの生れで，たいへんな寒がりやである。

57. チワワ　CHIHUAHUA

57　チワワ

（原産地　メキシコ）（用途　愛玩犬）

およそ犬の歴史はじまって以来の超小型犬である。コロンブスは現在キューバとして知られている島から「通常吠えなくて、唖のような小さな犬の一種を発見した」ことをスペイン皇帝に報告しているが、多分これはチワワであろうといわれている。また当時メキシコを旅行したアメリカ人たちは「小さいが肥った豚のような犬を見たが、地鼠や兎のように小さくて、土竜のように地中の穴に住んでいる」と述べている。したがってチワワのメキシコでの過去の生活は、野生の状態でチワワ地方に棲息していたものと想像される。なお土人はこの犬をアルコと呼んでいたといわれている。

チワワの歴史を多彩なものにする興味ある物語に、この犬は東洋の犬だとの説がある。数百年以前から東洋では動物を小さくしたり、また盆栽が趣味として流行したが、特に中国人は植物や魚を小さくし、ついに犬までも矮小化した。そしてその小さい犬はスペイン人によってメキシコに渡り一七八五年にメキシコ市に現われるようになった。そして富裕な家庭で大切に飼育されていたが次第にメキシコの北側に移動したと伝えられている。この説は一応有力のように思われるが、東洋にはこんな小型犬が存在した事実はない。ただチワワの耳は約四五度の角度で外側に傾斜しているのはスペインのパピョンという犬にそっくりなので何等かの関係があるのではないかと考えられる。おもしろいことに現在メキシコのチワワは全部アメリカ産なので、アメリカはチワワの保姆国のようなものであるが流行犬として圧倒的な人気がある。長毛と短毛の二種があり、長毛種は耳と肢と尾に飾毛を有し、胴はやや長くて柔らかく絹糸のようである。毛色はいろいろで斑のものもある。

58 ブラッセルス・グリフォン

（原産地　ベルギー）（用途　愛玩犬）

ベルギーのグリフォンは毛色と毛質によって三種に分けられるが、最も代表的なブラッセルス・グリフォンは赤味がかった褐色の毛色で自然の垂耳であるが、断耳をすると立耳となる。

58. ブラッセルスグリフォン BRUSSELS GRIFFON

そして尾は三分の二に断尾されている。被毛は堅くて口髭を生やしてあたかも鍾馗のような風貌をしている。

グリフォンの祖先についていろいろといわれているが、ベルギーの繁殖家がこの犬の祖先の小型のテリアにパグの血液を入れ、さらに小型のトーイ・スパニエルの血液をも導入したものと考えられているが口吻が上反りで鼻孔が高くついていて獅子鼻であるところなどはまことに特異な顔貌でなるほどと思わせる点が多々ある。ところが一四三四年に有名な画家であるヴァン・エイクの描いたグリフォンは粗い針金状の被毛で断耳されているが、鋭敏な眼光をしていて、サイズも現在のものとほとんど等しいとのことである。一八七〇年ごろになるとグリフォンはベルギーで非常に人気が高まったが、これはマリア女王がこの犬を寵愛されたからで、一八八〇年には人気は絶頂に達した。この年にブラッセルの展覧会で優勝した犬が英国に輸入されて、英国で人気が高まったが、アメリカに輸入されたのは一九〇〇年ごろのことである。体重三～四・五Kg。

59. シェットランド シープドッグ SHETLAND SHEEPDOG

スコットランドの北西部にあたるシエットランド島を生れ故郷としているこの犬は、コリーを全く小型にしたような優雅なかわいい犬である。気質は極めて温和で服従しやすく、農場の番犬、家庭の愛玩犬として飼育されている。
この犬の祖先は、多分コリーと同一で、長い間にシエットランド島の環境に影響されて小型化したものと考えられる。この孤島は北海に囲まれた岩の多い土地で、家畜の飼料も豊かでなく、小馬や比較的小型の羊が飼われており、牧羊犬も羊の大きさに適応している。毛色も体型もコリーと同じである。体高は30～38cm。

（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

ポメラニアンは，愛称をポメと呼ばれ，愛玩犬のなかでもかつてない敏捷さと鋭さを持っていることでたいへんな人気をよんだが，もちろんそればかりではなく，被毛の華麗さはなんといってもポメラニアン最大の特長である。かつてペキニーズと世界の愛玩犬の王座を争ったことがある。

60．ポメラニアン
POMERANIAN

60 ポメラニアン

（原産地　ドイツ）（用途　愛玩犬）

ポメラニアンは北ドイツのポメラニア地方の原産で、その名称もこれより起ったといわれているが、ドイツではこの名を嫌い小型スピッツ(Zwerg Spitz)と称している。元来は北方のスピッツ族に属し、祖先はアイスランドの橇犬の大型スピッツで、最初は大きくて体重が一三Kgもあったが、現在では三・二Kg前後の小さな犬に変型していて、大型犬の面影はいささかもない。彼等の祖先はドイツでは羊の番犬として使用されていたものである。

ポメラニアンは口吻が短くて尖っていて、狐のような顔貌で、小さな立耳をもち、飾毛が豊かな尾を扇のように背負い、全身美しい長毛に覆われたまことに魅力に溢れた小型犬で、今日では世界各地の展覧会に出陳され、愛犬家でこの犬を知らない者はない。

英国に紹介されたのは一八世紀の終りごろである。エリザベス女王は一八八八年イタリーに旅をされ呼名を〝マルコ〟というポメラニアンを持帰えられ、展覧会に出陳されたがマルコは体重が九Kgもあったと記録されているので、今日の標準より遙かに大きかったことがよくわかる。だが次第に小さな犬が一般に歓迎されるようになり、この要求にしたがって繁殖家はよい資質と被毛をギセイにすることなく、小さくすることに全力を傾注したと伝えられている。サイズの外に毛色にも関心が払われた。英国では白色は余り歓迎されず一時は茶色のセーブルが大流行して、希望者が多いので非常に高値をよんだといわれている。ただし英国にセーブルの犬が輸入されたのは一八九六年が最初である。体重の軽い小さな婦人向のものが作出されるようになって、ポメラニアンはたいへんな流行をみるようになり、婦人たちはこの美しい小型犬

に魅了された感があったが、次第に台頭して来たペキニーズに押され愛玩犬の王座を退くようになったがそれでも強固な地位を保っている。ポメラニアンの毛色は黒、茶、ブルー、白、チョコレート等があるがオレンジが最も好まれる。理想的な体重は一・八〜二・三Kgである。

61 キングチャールス・スパニエル

（原産地　イギリス）（用途　愛玩犬）

キングチャールス・スパニエルはその名称で明らかなとおり英国のチャールス一世がこの犬を愛されたからで、王は一六四九年に亡くなったがチャールス二世もまた寵愛されたと伝えられている。エリザベス朝時代には、繊細で恰好がよく、とても奇麗な犬であるといわれていたが、この犬の顔面や被毛は日本の狆や中国のパグにたいへんよく似ていて、祖先は関係が深いのではないかと考えられている。

キングチャールス・スパニエルは美しい被毛の小さな犬で性質は温順で毛質は長くて絹糸のようで柔らかく、毛色により次の四種に分けられる。黒と褐色、赤、白と黒と褐色、赤と白。アメリカではキングチャールスとはいわずにイングリッシュ・トーイ・スパニエルといっている。体重は四〜五・五Kg。

61. キング チャールス スパニエル
KING CHARLES SPANIEL

62. ちん（狆）
JAPANESE SPANIEL

狆（ちん）は日本が世界に誇ることができる唯一の家庭愛玩犬で、ジャパニーズ・スパニエル（Japanese Spaniel）または、ジャパンチン（Japan Chin）と称されて、この犬の真価はむしろ外国の愛犬家により早くから認められていた。1853年、日本開国とともに黒船に乗って洋行のトップを切ったのが、ほかならぬこの狆（ちん）である。

63．しばいぬ（柴犬）　SHIBA DOG

62 狆（ちん）

（原産地　日本）（用途　愛玩犬）

狆は大正年間までは巷によく見かけることができた。しかし昭和になると激減し今次大戦でますます衰微し、日本の犬でありながら珍しい存在となったことは惜まれる。狆は頭蓋が幅広くて円くおでこで眼が大きく、耳には飾毛が多くてやや前の方に垂れていて、口吻は短く、胴は方型体で、尾は背上に負い長い被毛に覆われている。四肢はやや細く頸のあたりの被毛は厚く大腿部にも飾毛が多く、毛色は黒と白または茶色と白の斑で、斑は胴や頬、耳に平均に分布していて、体重はおよそ一・五Kgぐらいのものが最もよいとされている。

このように気品の高い狆は徳川三〇〇年の江戸城の大奥で栄華を極めた生活をしていたころが爛熟期で、諸大名もこれに倣い城内で飼うことが流行し、ついに狆の医者まで現われたが、けだし獣医のはじまりである。この優雅な容姿をもつ狆もやがて数を増し、町家にも飼われるようになり室内で専ら婦女子の愛玩するところとなった。そして明治になると至るところにその粋な姿が見られたものであったが、洋犬熱に押されて年とともに衰微していった。

ところで狆は厳密な意味では他の日本犬と異なり、本邦土着の犬ではない。聖武天皇の天平四年（西暦七三二年）に新羅より貢物として朝廷に献上されたものが、わが国に渡来した最初である。しかし狆の祖先は朝鮮の犬ではなくヨーロッパの犬であるとされている。狆の祖先は多分スペイン系の小型犬で、ローマ、ギリシアを経て西域はシルクロードを交易路として支那大陸に渡来し、中国の宮廷でかなり繁殖された後に朝鮮に渡り、さらにそれがわが国にまで足跡をしるすことになったのであろう。それから長い間に同一の祖先を持つペキニーズとは

異なった独特なタイプに発達したものと考えられる。清少納言は日記の中に翁丸（おきなまる）という犬のことを記しているが、これは九九一〜一〇〇〇年ごろのことである。一八五三年日本が開国となり、その時上陸したペリーは日本の米の飯や干魚に驚くとともにこの小型犬に眼を奪われ、四頭の狆を持帰り英国のビクトリア女王に献じた。女王はこの珍稀な贈物をしきりと寵愛されたと伝えられている。その後この犬は黒船の往来とともにヨーロッパやアメリカに持ち帰られるようになり、大洋の交通が頻繁となるにつれて明治以降は海外に行く狆の数を増したことは浮世絵版画と軌を一にしている。従って今日ではよい狆はイギリスやフランス、アメリカに多いといわれるようになっている。最近はわが国でも狆の復興熱が高まり、徐々に数を増しつつあることは喜ばしいことである。狆の大きいものは一般に好まれない。

63 柴犬（しばいぬ）

（原産地　日本）（用途　猟犬、番犬）

柴犬という名は実に簡単で、しかも親しみ易くこの犬をよく表現している。この語源は余り明白ではないが諸説がある。即ち柴犬は枯芝色をしているからだといわれているし、またシバとは小さい意味であり、柴をくぐるのが上手であるとか、あるいは柴を鼻でかき分けて獲物を追うのが巧いからだともいわれている。

柴犬は系統的には北方系の秋田犬とは反対に南方系統に属し東インド地方よりフィリピンにわたり広く分布しているパリア犬に近いものである。また本邦では縄文文化時代の遺蹟から小型犬の骨格が発掘されているので、柴犬の祖先は非常に古くからわが国に存在し、おそらく先住民族とともに渡来したものと思われる。柴犬は産地により信州柴、美濃柴、越後柴、石州柴などと呼ばれたが、福島、群馬、山梨、長野、

64．しこくいぬ（四国犬）　SHIKOKU DOG

中型の日本犬は質，量ともに日本犬の中心をなすものであるが，石器時代よりわが国に存在していた。祖先はパン・シベリア民族を追って発展したネオ・シベリア民族の飼養したものが，朝鮮半島を経てわが国に渡来したものと推定されている。

紀州犬の仔

65. きしゅういぬ（紀州犬）　KISYU DOG

岐阜、新潟、鳥取、島根の各県や四国等の山岳地帯に分布していたものである。これ等の山岳重畳たる地方は交通が不便で、孤立していたため柴犬の純粋性が長い間保たれたものである。非常に素朴な味わいの深い犬で小さいながら内に烈々たる気魄をもっていて、可憐な容姿は都会人の郷愁をさそうものがある。

性質は俊敏でキビキビしていて果敢であり、如何にも日本の犬らしく地味で、山では小型獣猟犬として他の追随を許さぬ能力を有し、家庭では従順な伴侶犬、番犬としてまことに理想的な犬である。実猟方面は兎、テン、狸、狐猟を得意とし、肢が軽く終日疾走しても疲労を知らず闘志は旺盛である。雉や山鳥を樹の上に追上げ猟師をして撃ち落させる特技がある。本質的には平地の猟や水辺の鴨猟には不向で山岳地の猟に向いている。体質は頑健で無駄吠えをしないので喧騒でなく、未知の人たちにはなれ難いのが日本犬の特徴であるが、飼い易いのがまた柴犬の長所である。

文部省は昭和十一年天然記念物保存法（現在の文化財保護法）により柴犬を指定したが、近年になって交通が発達し、便利になるにつれて辺境地方の柴犬も雑犬と混血し、さらに戦争のために数を減少し、純粋なものは非常に少なくなっている。その上終戦後の残存犬で産地の異った系統と交配を余儀なくされたので、地域的な特徴は失われつつある。

実際、美濃柴などは純度が高かったものであるが、産地には確固たる系統も残存していないし、信州柴も一時は絶滅に瀕し、山梨産の犬を移入して再興を計っているのが現状である。ただ単に耳が立って尾を巻いた小さな犬が柴犬だと考えたら誤りで、愛知県の三河地方で作出されている疑似柴犬と混同される危険がある。体高は牡三九・四㌢、牝三六・四㌢ぐらい。

64　四国犬

（原産地　日本）（用途　猟犬、番犬）

日本古来の犬を大別すると大型、中型、小型の三種に分けることができる。大型では今日の秋田犬、小型は柴犬で、中型に属するものには北は北海道の北海道犬即ちアイヌ犬が有名で、東北地方では秋田マタギが現存するが、山形の高安犬は既に滅亡したものと考えられる。関東地方では天城犬も姿を消し、山梨では甲斐犬が残存しているに過ぎない。近畿では最も著名な紀州犬が数多く繁栄しているが、九州では早くから薩摩犬は絶滅し中型犬は余り振わない。四国は特に高知が四国犬の中心地で全島にわたり中型犬の勢力が強く、中国地方もこの影響をうけて四国犬の繁殖地帯となっている。四国犬は一名高知犬とも言われ、主として高知県の幡多郡と土佐郡本山村方面にすぐれた犬が残存していてこの両系が主流をなしている。古くから猪、鹿猟に用いられたもので、悍威（かんい）に富み忍耐強く、家庭の番犬としても好適である。毛色は概して胡麻が多く黒の四ツ目（眼の上に褐色の斑のあるもの）のものもある。中型の日本犬の体高は牡五一・五㌢、牝四八・五㌢ぐらいと共通している。

65　紀州犬

（原産地　日本）（用途　猟犬、番犬）

紀州犬は三重、和歌山に主として猪猟に用いられるもので、頑健な体軀と精悍な気力をもっている。鹿狩りにも使用されるがこの方は猪犬よりスピードがある。紀州犬は南勢の大内山犬とか熊野犬、太地方面の太地犬、日高有田方面の日高犬など産地により細分されるが、毛色の白いものが多く六、七割を占めている。紀州犬は怜悧（れいり）で機敏な表情で、人には従順で家庭犬としてもよい素質を備えている。

純粋の柴犬・四国犬・紀州犬・北海道犬・秋田犬等は，すべて天然記念物の指定をうけている。犬は雑種化される危険が非常に多いので，これら日本犬の保存については，愛好家の理解と保護が必要とされている。

66. ほっかいどういぬ（北海道犬）　HOKKAIDO DOG

67．あきたいぬ（秋田犬）
AKITA DOG

66 北海道犬

（原産地　日本）（用途　猟犬、番犬）

北海道犬は一名アイヌ犬ともいわれるが、内地の中型日本犬と同系統で、カラフト犬などとその点異なっている。純粋種の比較的多く残っている地方は札幌周辺と岩見沢・千歳・日高方面であるといわれ被毛が厚いのも寒地の犬の特色で、それがため外貌はややずんぐりした感じを与える。主として熊狩りに用いられ、勇猛でしかもまことに聡明な犬で多くは家庭犬として飼育されている。毛色は白・茶・胡麻等が多い。

67 秋田犬

（原産地　日本）（用途　番犬）

秋田犬は過去一〇〇年ばかりの間に完成されたもので、その歴史は浅い。また秋田犬が現在のように洗練されたタイプに固定されたのは最近のことであるにもかかわらず、「忠犬ハチ公」の物語で全国津々浦々にまで宣伝され、秋田犬の声価を高めた。秋田犬は一名大館犬（おおだていぬ）、または鹿角犬とも称され、秋田県の大館や鹿角地方を中心に発達して来た犬で、大館の城主佐竹侯が代々闘犬を好んだので、各地の豪農もこれに習って、大型で強力な逞しい大館犬を飼育するようになったと伝えられている。専ら闘犬を目的としたのでそれに適応した力量がなくてはならず、結果においては今日の立派な体軀を作り出す原因となった。明治三四年、時の秋田県知事は闘犬の禁止令を公布したので、秋田犬は長い間不遇な時代が続き、大正時代には大館にほとんど姿が見られず、むしろ青森や山形の一部に残っていたような状態であった。昭和にはいると日本犬が再認識され秋田犬もようやく発展段階にはいったが、今次大戦のため甚大なる打撃をうけた。戦後は残存犬で復興が計られたが質的向上の跡いちじるしく、一時、秋田犬ブーム

を起こしたことは記憶に新しい。秋田犬は大型犬に属し、この犬の魅力はなんといっても堂々たる体軀より受ける豪快な感じと重厚さにあり、悍威と素朴さはまた捨て難いものがある。体高は牡六六・六㌢、牝六〇・六㌢。

68 土佐犬

（原産地　日本）（用途　闘犬、番犬）

土佐犬は本邦古来の犬ではなく、強力な闘犬種を作る目的で明治維新に四国の土佐の犬と洋犬との混血によりできたものである。従って土佐犬の外貌は日本犬と著るしく異なり、被毛は短くて耳は垂れ、口吻は角ばったいわゆる箱口で、頸に咽喉垂皮があり、尾は根元が太く先細で垂れていて、日本の犬らしい特徴が全くない。土佐犬の起源は、幕末のころ土佐藩主山内容堂侯が武士の志気を鼓舞するため、闘犬を奨励したのが始まりで各地に闘犬が盛んに行われるようになったが、当時の犬は現在の土佐犬でなく土佐の四国犬であった。嘉永元年に長崎より来た猛犬とまず混血が試みられ、さらに明治にはいると高知在住の英人のブルドッグやドイツ人の医師のマスチーフが交配され、またボストンブルも交配されたと伝えられている。その後にもグレートデンやマスチーフ、ブルマスチーフ等と度々混血して今日の大型犬ができ上ったのであるが、マスチーフ・タイプが型態にはっきりと現われているので、分類上はマスチーフ族である。土佐犬の闘技はしばしば禁止されたが、それにもかかわらず各地で行われていた。しかし今次大戦で深刻な打撃をうけ、終戦後は残存犬も少なく食糧事情の比較的恵まれた東北地方や青森に疎開した犬によって再興が計られた。土佐では絶滅に瀕し他県より呼び戻して今日に至っている。土佐犬は訓練すれば立派な番犬となる。体高は牡六六㌢以上（体重四五㎏以上）牝六一㌢以上（体重三四㎏以上）。

68．とさいぬ（土佐犬）　TOSA DOG

横綱の化粧まわしをつけた土佐犬

ポメラニアン

犬の歴史

犬の起源　犬は動物学上は脊椎動物（門）、哺乳類（綱）、食肉類（目）、犬（科）、犬（属）に属していて、学名はカニス・ファミリアリス（*Canis familiaris* Linnaeus）という。その種類は家畜動物として最も多くおよそ八五〇種にも達し、しかも世界各地に人のすむところ必ず彼らの姿を見ることができるほど広く分布している。元来は食肉獣であるが家畜として飼育されてきたので動植物の混合食を摂るようになり、いわゆる雑食動物となった。そのため歯は食肉動物のように鋭利であるが、消化器は穀物が消化され易いように腸の長さがやや長く発達している。また指先で歩く趾行動物ではあるが、前肢の五本の指のうち親指は上にあがり、後肢の親指は退化してなくなり、歩行の用を果すことができなくなっているのが、今日の犬の姿である。

さて、この家畜としては最古の動物である犬の太古の祖先が、どのようにして地球上に誕生したか、その起源と初期の進化の段階は古代人類の歴史と同じように、実は十分な資料がないため神秘のベールに包まれていて、全貌を明らかにすることは困難である。したがって学者の説も仮説や推測的な理論によらなければならないのも、いたしかたのないところだろう。古生物学者の説によれば今より凡そ四〇〇〇万年前、即ち地質時代の始新世のころは哺乳類はまだ比較的新しくて今のように大きくはなかった。馬は小さな羊くらいで駱駝は角のない羊に似ていて、犀は馬のようで角がなく、とても人類に危害を加えるほどの力がなかったといわれている。

この時代にミアシス（*Miacis*）という小さな食肉性の哺乳類が存在していた。ミアシスは樹上

に生息する動物で肢が短くて胴と尾が長く、大きさはほぼ臭猫（くさねこ）くらいで、外貌は今日のインドの麝香猫（じゃこうねこ）に似ていたが、そもそもこのミアシスが犬や熊の最も原始的な祖先なのである。

ミアシスは始新世の次の漸新世の時代に進化して二つの異なった動物となった。即ち、ダフィーヌス（*Daphaenus*）とシノデクテス（*Cynodictis*）がそれである。ダフィーヌスは現在のコヨーテ（草原狼）ほどの大きさで、肢が短く、頭部は大きくて重々しく、尾は太くて長かったが、徐々に大きくなり、体重が増加して駈足歩様が変化して、ゆっくりとまたどっしりした歩様となり、かくして最初の熊が誕生したのである。シノデクテスはミアシスに似て小さく、細っそりして胴が長く猫のような爪をもっていたが、漸新世の次の中新世になるとシノデクテスは最初の犬科動物に属する肢の長い二つのグループに進化した。その一つであるテムノシオン（*Temnocyon*）はアフリカやインドのハイエナの祖先であり、また他の一つであるシノデスムス（*Cynodesmus*）は現在の犬に外貌がよく似たトマークチュス（*Tomarctus*）を経てわずかばかりの骨格の構造の変化により狼、コヨーテ、犬等のほかに狐などが生じたといわれる。トマークチュスこそは今日の畜犬の発祥といっても差支ない。以上が犬の原始的な進化の簡単な歴史である。

犬と狼　現在の犬の近縁の動物の名をあげるならば狼（おおかみ）（*Canis lupus*）、ジャッカル（*Canis aureus*）、コヨーテ（*Canis latrans*）、ヤマイヌ（*Canis hodophylox*）などがあるが、本邦に生息していた小型狼の一種であるヤマイヌは既に絶滅して見ることができない。また狐や狸の類はやや遠縁な存在となっている。ここで注意すべきことはこれらの犬属は犬以外は如何に外

貌が近似していても家畜となっているものは一つもないことである。

そこで生活状態や外貌は勿論のこと、心理的にもまた生理的にも、犬にもっとも似ている狼が、犬の祖先であるという説は、古くから一般に信じられている。紀元前四世紀にギリシアの哲学者アリストートルは狼と犬の交配について述べているし、また一世紀ごろローマの博物学者プリニーもそのことを記している。それ以来狼と犬との関係については無数の記録がある。ある学者は「現代の犬は狼の子孫として継承してきた多くの習性を持っている。排便の後に前肢で地上を引っ搔き、後肢で蹴って整然と土をかけて包んでしまうことなどもその一つである」といっている。またダーウィンは「犬がカーペットの上や硬いものの上に眠ろうとする時は、ぐるぐる廻って無意識のうちに前肢をあたかも草を踏み倒して穴を掘るようにする習性は、野生の両親が草深い平地や森のなかでやったことを継承している」と述べている。このような習性は、犬科動物に多く見られるところで、ジャッカルや狐にも認めることができる。

一九三〇年ロシアのイリーン (N. A. Ilijin) はモスクワの動物園で狼と犬の沢山の雑種をつくって実験した結果、雑種は十分に受精能力があり、毛色や斑点、眼色、耳の形状、頭蓋の特徴、大きさ等は遺伝的に典型的なメンデリズムが認められ、妊娠期間や産仔の開眼するまでの日数と乳歯の

犬の先祖といわれるシノデクテス

生える順序なども、われわれの飼育している家犬と同一であることを確かめた。また純然たる野生犬が家犬のように吠えることを覚えるし、同じ犬を孤立した場所に置くと狼のように遠吠えをするようになることを立証した。そしていろいろな犬の祖先は単一の狼から生じたことをこれらが暗示しているといっている。

しかしイリーンによって得られた犬と狼の類似点は、犬とジャッカルの間にもひとしく適用できて、また頗る多産であるといわれている。ジャッカルは

犬とジャッカル

南欧からアフリカ、アジア方面の熱帯地方から温帯に棲み、狼のように排他的に団結して群れを組むことがなく、本質的には孤独性が強く一定の地域にとじこもる性向があり、体高は四〇〜四五糎ぐらいで食物も家犬のように雑食性で、狼と違って人に危害を加えない。動物心理学者のロレンツ（Konrad Z. Lorenz）は犬の個性の中にたいへんに異なった二つのタイプがあり、その一つは狼のタイプ、他はジャッカルのタイプで、この異なったタイプはそれぞれ狼とジャッカルから発していると信じ、狼の血液の濃厚なものは北方系の橇犬として有名なエスキモー犬やハースキー、ライカ犬等で、ジャッカルの血液はグレートデンやウルフハウンド等に濃厚であると心理的に分析している。

ダーウィンはアジアの狼からアジアの犬が、ヨーロッパの狼からヨーロッパの犬が生じたという仮設を元にして人為陶汰を加味した論拠を発表しているけれども、狼やジャッカルが人に飼育されて家畜化したものが今日の犬であると簡単に信ずることはできない。何故ならば現在でもアジアやアフリカの熱帯から温帯にかけて広く分布しているパリア犬やオーストラリアのディンゴ

犬のように、原始的な生活をしている野生犬と狼とは全く異なった生活をしているからである。犬と狼とはたしかに形態学的にも生態学的にも、また生理学的にも非常に類似していることは事実であるが、だからといって犬の祖先が狼であるという決定的な証拠にはならない。このことはジャッカルについても同様である。しかも犬は世界各地で広範囲に発生している実実からして犬属は同一の祖先より進化発生し、後になって狼またはジャッカルと若干の混血が行なわれて今日に至っていると解釈するのが妥当であろう。

野生犬の馴化

犬の発展段階において最も重要なことは犬の家畜化、即ち野生の原始犬を馴化して畜犬とすることにある。現在でも前述のように野生犬や半野生犬が存在しているが、大部分のものは馴化、即ち手なづけられた家犬として今日の繁栄を招来しているのである。野生犬を馴化した端緒は偶然に人類が犬の仔を拾って育てたものが、他の動物から保護されることに心持ちよい感応を受けて大きくなったのが始まりであろうといわれるが、馴化はそのような偶発的な面ばかりでなく、野生犬と人類の立場の両面から相互の利益がこの手段を産んだものと考えられる。氷河時代の食糧難の饑餓状態におかれた犬の祖先が、空腹に耐えかねて人類のおこぼれや廃残物を、また塩分をねらって接近したものと想像される。したがって原始人と犬の接触した所では各所で畜犬を生じたであろうし、また馴化することにより原始人は狩猟にこれを用いたり、また番犬として役立つことを知ったに違いない。いずれにしても馴化は人類の歴史の比較的早期に行われたらしいが、ヨーロッパ原人といわれるクロマニヨンやネアンデルタール人は洞穴に住んで野獣の襲撃を避けていたが犬を連れていなかった。ところが石器時代の中期にな

るとアジアからバルチック地域に定住したブロンド髪のマグレモージアンは犬を連れていて野獣の襲撃から身を守ったり、狩猟に使ったといわれている。しかし野生犬はなかなか手なづけにくく、また彼らは捕えられてから俄かに友だちになったのではなく、野営の人夫や居候から家来となり最後に家犬となったもので、その間非常に長い歳月を経ているのである。

犬の系統と種類

このようにして古代犬は進化し馴化されてきたが、一方今日の家犬には非常に多くの犬種とタイプがある。これらの様々な銘柄の犬達がどのような野生形態の犬から出ているかを調べるには、現代の犬は余りにも高度に家畜化された結果複雑になっているため解決は困難である。しかし最も初期の家犬のタイプとして知られているのはモスクワ付近の中石器時代の先住民族の遺跡より発掘された狼によく似た学名カニス・ファミリアリス・プチアチニ (*Canis familiaris putiatini* Studer) と称される遺骨で、頭部の前方に窪みがあり明らかに馴化されていた証拠である。これは最も原始的なタイプであって、学者の説によると、このプチアチニから他のいろいろなタイプが進化したものとされている。この原型より後述のタイプに分化し、それより現在の家犬に密接につながっているといってよい。パリア犬やディンゴ犬もこれに属している。

カニス・ファミリアリス・パルストリス (*Canis familiaris palustris* Rutimeyer)

この犬の頭骨はスイスの新石器時代の打杭式湖上住居の遺跡より発掘されたもので泥炭犬（トーフ犬）または沼沢犬とも称されるものの原型である。打杭式住居とは湖の畔から湖上に杭を打ちそこに粗末な小屋を作り生活していたもので陸との出入りには梯子を用い、陸の害獣の侵入を

防いでいた。トーフ犬は体軀が矮小で馴化されていて、ヨーロッパに広く分布していたものと考えられ、シベリアのツングースが原種に近いとされている。パルストリスはポメラニアン型ともいわれる。チャウ・チャウ、テリア、スピッツ、ピンシャー等はこの系統より形成された。

カニス・ファミリアリス・イノストランゼヴィ（*Canis familiaris inostranzevi* Anutchin）

この骨格はロシアのラトガ湖畔に発見されたもので、新石器時代の末期のものとされているが一般に北方犬型と称されている。シベリアのライカ犬、エスキモー犬、秋田犬、カラフト犬などはこの系統に属している。また青銅犬との交配により牧羊犬を生じた。なおスイスの牧羊犬よりセント・バーナード、ピレネ犬を生じ、猟犬型との交配によりプードルが生じた。

カニス・ファミリアリス・デクマヌス（*Canis familiaris decumanus* Nehring）

番犬型と称されるタイプで北方犬型にやや近いものである。本系統に属するものは闘犬種が多く、頑健な体軀と垂耳をもち被毛は短い。マスチーフ、グレートデン、ブルドッグ、ボクサーが代表的な犬種とされている。

カニス・ファミリアリス・マトリスオプテマエ（*Canis familiaris matris-optimae* Jetteles）

発見者エッテルがその母を記念して命名した名称で、一般に青銅犬と呼ばれている。これは人類が武器や道具類に銅と錫の合金である青銅を使用した紀元前約二〇〇〇年ごろの遺跡より発見された骨格にもとづくものである。青銅犬は家畜飼養と関係が深く最も代表的なものはシェパードで、その他スコットランドのコリーはこの系統に近い。

カニス・ファミリアリス・インテルメデウス（*Canis familiaris intermedius* Woldrich）

青銅犬より分離されたもので、このタイプは中型または小型のサイズのもので垂耳で被毛に長短があり、子孫は主として猟犬に用いられているものが多いので、猟犬型とも称されている。ポインター、セター、スパニエル、ダックスフンドやスパニエルの子孫であるペキニーズ、狆等はこの系統に属する。エアデール・テリアは泥炭犬の血液を導入してできたが、土台となったオッターハウンドはこの系統に属する。

カニス・ファミリアリス・グラジュス (*Canis familiaris grajus* Linnaeus)

グレーハウンド型ともいわれるが、この系統は非常に脚力が速く、主として鹿や、羚羊、兎等の狩猟に用いられたものでグレーハウンドが最も代表的で、イギリスのディアハウンド、ボルゾイ、サルキー、アフガンハウンド等もこれに属する。

ギリシアの古代壺にあらわれた猟犬

カニス・ファミリアリス・イングエ (*Canis familiaris inguae* Tschudi)

南アメリカのインカ王国の名に因んで与えられたインカ犬で、種々のタイプがあるが、複雑で一定していない。非常に原始的なものもあり、メキシコのチワワなどもこの系統に属する。

犬の感覚

世のなかには愛犬家が非常に多く驚くばかりであるが、犬の行動や心理をよく理解している人は比較的少ないようである。というのは犬は日常われわれの生活に極めて接近して生活をしているので、つい彼らもまたわれわれと同じような感情や知能の単に縮小されたものを持っているに過ぎないと錯覚している人々が多いからである。ところが科学的にいろいろな実験を行なった結果、犬の感覚はわれわれとたいへんにちがっていて、犬と人は全く異なった世界に生活していることがよくわかるようになった。犬の世界における感覚の利用度を比較すれば、嗅覚を一〇〇％とすると聴覚が七〇％、視覚が五〇％、味覚が二〇％、触覚は一〇％ぐらいで、犬にとっては視覚よりいかに嗅覚がたいせつであるかを知ることができる。

嗅　覚

古代ギリシアの詩人ホーマーは史詩「オデッセー」の中で、英雄オデッセーがトロイが陥落した二〇年後、変装してわが家に戻ったとき、だれもオデッセーと気づく者はなかったが、彼の愛犬であったアルゴスだけは主人を知っていて慕いよったと述べている。これは犬の記憶がすぐれているばかりでなく、犬の嗅覚が非常に鋭敏であることを如実に物語るものである。実際犬の驚くべき嗅覚力は各種の実験により明らかにされているが、犬の鼻孔には嗅細胞が人よりも遙かに多くて嗅神経がよく発達しているばかりでなく、鼻孔が広くて空気中の微細な匂いを多く吸収できる構造になっている。犬は産まれた時は眼は完全に閉じていて、耳も聴覚が働いていないが、嗅覚の窓だけは開いていて乳の匂いを慕って這い出し母犬の乳房にすがりつ

くのである。このようにして育った仔犬は成長するに従っていよいよ嗅覚が発達し、人とはとても比較にならないほど鋭敏となる。そのよい例は、ある犬は一三ガロン（約二斗七升）の水に、小匙一杯の食塩を入れたものと、蒸溜水を識別することができたし、また有機酸に至ってはさらに敏感で有機酸の混合液の一〇〇〇万分の一の稀釈液をも感知することができた。それだけでなく麝香の人工のものと天然のものを区別できるばかりでなく、刺すような匂いのするニトロベンゾールとこれに似た他の科学質の混合臭をも識別できたのである。これ等の匂いは余りにも稀薄であるか、または刺戟が強過ぎるので、人の嗅神経ではとても識別できないもので、いまさらながら犬の嗅覚力の偉大さにただ驚くのほかはない。

しかし犬はどちらかというと人と違って花のような植物性の臭気には余り関心がなく、動物性の脂肪酸のようなものには強い関心を示す。それで獣や鳥類の臭気には敏感であるし、人の皮膚の汗線や脂線より分泌される塩分、尿酸、脂肪酸などの総合臭である個人臭をよく嗅ぎわけることができオデッセーのアルゴスのような話になるのである。警察犬はこのように高度に発達した嗅覚を利用して、犯人が現場から逃走する際に遺留した微かな嗅跡を辿ってその逃走経路を追求することができるし、また今まで庭先に遊んでいた子供が姿を消して迷子になった時など行先を探すこともできる。よく人は障子の穴から覗くが、犬は鼻を穴から出して嗅ぐといわれるがこれは犬にとっては視覚よりも嗅覚がたいせつであることを表現している。それだけに犬は人よりも遙かに嗅覚的な世界に生活しており、事物の判断に嗅覚にたよる面が頗る大であることを知らねばならない。しかしこの鋭敏な嗅覚も病気で鼻鏡が乾燥しているときは十分に発揮できないし、

また眠っているときは活動を休止している。

視　覚　犬の眼は一見たいへんに鋭い印象をうけるが、案に相違して人よりも視力が弱く、しかも近視である。実験によると中型犬は一〇〇メートルを越すと他人と主人の姿を識別することはできない。また一四頭の警察犬で実験したところによると動かない目標には約五五〇メートルまでは感知できたが、動く目標には約八二五メートルまで感知することが明らかになった。これはグレーハウンドやボルゾイのように視力で獲物を捉える必要から、犬の視力は動くものに対し特に敏感であることを示すものである。犬の視力が人に及ばないのは人よりも背が低いことにも原因しているが小型の犬はさらに遠くが見えないことはいうまでもない。それで犬は高い所に登りたがる習性を持っているのである。また犬と人の視野を比較すると犬の視野は非常に広く、眼の頭部についている位置より測定すると人は約一八〇度であるが、犬は二五〇度であるから眼球を回転させたり振り向いて側方を余り気にする必要がないのである。

犬の眼の最大の特徴はほとんど色盲であることである。それで犬は色彩を人のように区別できない。犬を飼っている人々の中には、自分の着物の色彩を犬が知っていると信じている人もあるが、見分けることのできるのは暗灰色と明るい緑色ぐらいのもので、それも決して明瞭ではないように思われる。聴覚の条件反射のテストのように犬にいろいろな色彩を見せて唾液の分泌を測定して、色彩の区別の実験を行なったがこの試みは成功しなかったといわれている。要するに人は天然色のテレビを楽しんでいるのに反して、犬は白黒のテレビを見ているような相違があるといってよい。またこのことは、愛犬家にとっては犬の毛色の美しさは大変な魅力であるけれども、

犬には大した意味のないことになる。犬は元来は夜行性の動物で昼は寝て、夜になると獲物をあさりに活動をしたので、暗闇では色彩を見分ける必要がない訳で別に不便はないものと考えられる。しかしその代りに少ない光線で物を見ることのできる暗視力が発達しているのも夜行性動物の特徴である。

聴覚　犬の耳の形は野生時代にはシェパードや日本犬のように直立していたものであるが、人に飼育されるようになって垂れるように変化した。音波をキャッチするには垂耳よりも可動性のある直立耳が物理的に有利であることはいうまでもない。犬の聴覚は外敵から身の安全を計ろうとする警戒心より発達したものであり、頗る敏感であることはだれでもよく知っているが、それには三つの大きな特徴がある。即ち非常に高い音と微かな音を聞くことができ、また音の方向をつきとめる能力と音色を識別できることである。

犬の聴覚は人よりも四倍も遠い距離から音を聞くことのできることがエンゲルマン氏により立証されている。この実験には直径三ミリの小さな鋼鉄の玉を三センチの高さから鉄板の上に落した音は、人は六メートル以上離れたところでは聞くことができないが、犬は二四メートルの距離からでも聞くことができた。音の大きさは距離の二乗に反比例するので、犬の聴覚は人の一六倍も鋭敏であるということになる。人の聴覚は一秒間に一六から二〇、〇〇〇サイクルの振動数しか聞くことができない(普通の会話は二、〇〇〇サイクルぐらい)が、犬は一秒間におよそ一〇〇、〇〇〇サイクルまで聞くことができる。したがって人の聞くことのできない超音波を感ずることができ聴覚の範囲は非常に広汎である。外国の猟場では密猟者を捕えるために番犬を飼っている

が、この犬を呼び寄せるには笛を吹くのである。しかしその笛の音は人には全く聞えず犬だけに聞えるようにできているのも今述べた原理を応用したものである。いずれにしても犬がわれわれに感じない音に反応して不思議な行動をとったり吠えたりすることのあるのも道理といわねばならない。

また条件反射、即ち食事前に一定の音を聞かせて、犬の口から無意識的に分泌する唾液を測定する方法を用いて実験した結果によると、犬はメトロノーム（拍節器）の速さの相違を一分間に一〇〇回と九六回とを区別できたし、さらに一分間に一三三回と一四四回を区別できたといわれている。犬は音源をつきとめる能力がいかに鋭いかは次の方法によって知ることができる。即ち犬を六〇個の小さな衝立（ついたて）を円型に並べておいて半径三メートルの中心に坐らせる。衝立のうしろにはブザーを取付けておきブザーが鳴るとその背後にある肉片を食べることができる仕掛にして置く。そして実験する人は輪の外にいてブザーを鳴らすと、犬はブザーの鳴った衝立の方向に走るが、この実験で犬は三二の方向の音源をつきとめることができた。しかし人はようやく一六の方向の音源しか当てることができなかった。音源は人でも左右は比較的当て易いが上下は難しく犬も同様である。音による方向感は両耳に音波が達するわずかな差異により判別できる性質のものであるが、それにしても犬はすばらしい。

また犬はピアノの鍵の隣りの二つの音を区別できるだけでなく、四分の一と八分の一の音階の相違を識別できたが、犬が音の速さと音階を識別できるからといってメロデーを理解し音楽がわかると早合点してはならない。それは頭脳の発達に関係する問題であるからである。

犬の帰家性

驚くべき実話　昭和十二年二月八日の早朝のことである。東京小石川の加瀬俊一さんの門前で、けたたましい犬の吠声がするので、家の人が出て見ると驚いた。皮膚病治療のために大阪の家畜病院にあづけてある、エアデール・テリアのロイスがやつれはてて泥まみれで飛びついたからである。

夢かとばかりに驚いた加瀬さんが、念のため大阪へ電話で問合せると「実はだいぶ前から行方不明で、市内を探していた」という返事で、主人恋しさの余り東海道を歩き続けて来たことがわかった。そこで数日間ご馳走をしてやったうえ、「病気がなおるまで辛抱しなさい」と汽車で送り返したという実話がある。

このような例は数多くあり古くはイタリーのミラノの犬がナポレオンのロシア遠征の際に、ロシアで主人にはぐれ約一年後に、衰え果てた姿でミラノに帰った挿話が伝えられている。また一九二三年の八月アメリカのオレゴン州のシルバートンに住むプレジャー夫妻は、インデアナ州のオルコット市に用ができたので自動車旅行をすることになった。しかしわが子のように可愛がっているコリーのボビー（二才半の牡）をどうしても家に残しておくことができなくて一緒に連れてゆくことにした。ところがオルコット市についてから町でボビーとはぐれてしまった。八方手を尽して探したが全く手がかりがなく、ついに諦めてシルバートンへ帰らなければならなくなった。それから約六カ月後にボビーは汚れはてた姿でシルバートンのわが家に帰ってきたので夫妻

は大いに驚き狂喜したといわれるが、このことは大へんな評判になり、アメリカ全土に報道された。ボビーはまだ一度も歩いたことのない北アメリカ大陸の三分の二以上、約三、三〇〇キロを横断したことになる。このような実例は数多く報告されており、その真実性を決して疑うことはできない。世界の少年少女に愛読されたエリク・ナイト作の「名犬ラッシー」やターヒューン作の「名犬ラッド」の物語もこの犬の帰家性(オリエンテーション)をテーマとしているのである。

帰家性の実験

犬、猫、馬その他の獣が故意に、或は偶然に遠く家を離れて、しばらくして戻って来る行動については動物心理学的に研究されているが、犬ほど長距離から戻る動物は伝書鳩や渡り鳥を除いてはない。この犬の不思議な能力について最初の科学的な実験を行なった人は一九三一年ドイツのバスチァン・シュミット氏である。同氏は生れ故郷のプッフハイムの近郊から出たことのないコリーの雑種、五才半のマックスルという名の牡犬を籠に入れて蓋をして自動車に積み、さらに油布をかけて、全々視覚のオリエンテーションが利かないようにして、午前八時三五分に家を出発して直線距離で六キロのテーゲルスリードの農場の近くに運んで、九時三五分にブッフハイムと反対の方向に頭を向けて籠から出して放したのである。犬はあちこち帰宿しながら走り回っていたが、一〇時五分に漸く家の方向にあたりをつけたように見えてその方向に進み、左右に大きく迷いながら一一キロを歩き午前一一時一三分に家に帰った。シュミット氏は犬がこの距離に費した実際の時間は一時間一八分と断定している。

同様の実験を一八日後に繰返した。この時マックスルは籠から出されて六分間で家の方向に出発し道順は始めの時とほとんど同じであったが、左右へのずれが少なくなり、前回よりも三五分

間短縮して、四三分間で帰った。さらに第三回目の実験も行ったが第二回目とほとんど同様であった。

右の実験でシュミット氏はマックスルは籠から出された二、三分間は、その表情と行動は野獣のようで、路傍の樹木を嗅いでみることもせず、帰路はほとんど鼻を用いなかったし、また犬の方向の決定は視覚によって行われたのではないと判断している。

次にノラという二才半のシェパードの牝犬で前回と同じく慎重に直線距離四キロの地点で実験を行なったが、籠から出されて二六分後に方向を定め八・五キロも歩き、二時間一〇分を費して家に戻った。さらに第二回目の実験を四〇日後に行なったが、ノラは一回目のコースを選ばずに、しかもずっと近い路を選び、方向を定めるのにも特別の動作を示さずその都度瞬間的に決めながら歩いたので、距離も時間も短縮されて五キロを三七分（前回より一時間三三分短い）で戻ったのである。以上の実験でマックスルよりノラの方が良い成績を示しているが、その理由が果して二頭の飼養環境の相違によるものか、天性の差によるものか決し難い。

以上の実験で明らかな通り嗅覚によらず、視覚によらず、聴覚によらず、それでは何によって犬の帰家行動を説明すべきであろうか？　シュミット氏は「犬のオリエンテーションは独自のある未知の感覚を仮定せざるを得ない」と述べている。

しかしシュミット氏の行なった実験は自然の状態では絶対に起り得ない問題である。従ってオリエンテーションを本能的な行動と解釈することは妥当とは考えられない。即ちいかなる祖先でも全く遭遇したことのない問題を、生れて始めて自己の力で解決しているこの帰家行動は、本能

の定義に反しているといわねばならないからである。

またオリエンテーションをシュミット氏のように独自の未知の感覚が犬に存在すると仮定するならば、それはどんな感覚器官であろうか？　またその未知の感覚器官は電気かあるいは磁気のような性質の刺戟をうけて働くのであろうかという疑問が生ずる。伝書鳩は磁気を感じて方向を定めるともいわれるが、鳩の頭に磁石はついていないし、いくら研究しても磁石の働きをする器官は発見できないと学者は述べている。犬とても同様である。しかし鳥類は地上を高く飛ぶので土地の標識を知っているし、見知らぬ場所に放たれても、知った土地に出るまであちこち探し、だいたいの方向を見分けることができるが、地上の犬はそういう真似が全くできない点が異なっている。

しかし、すべての犬に帰家性があるとは信じられないけれども犬には一つの土地への愛着があり、特に他の獣類より強いように思われる。種々の要素が局地的愛着を醸成する原因となるが、なかんずく主人と主人の家に対する犬の社会的愛着が大きいと考えられる。つね日ごろから主人や家族に虐待されている犬に、もしも帰家性を持っていると仮定しても、その家に戻ることはまず心理的に想像できない。それで主人と家族の愛情が絶対的なものではないにしても、千里の道をも戻りつく誘因となることは否定できないであろう。

究極的にはオリエンテーションは生物学の分野で一番大きな疑問とされ、今もなお解決できないでいるが、厳密な科学的研究により合理的な理論が確立されて、具体的に説明できる日のくることが望まれる。

犬の知能

利口なハンス二世

一九〇五年ごろドイツで「ハンス二世」という名の驚くべき利口な馬が現われたことがある。「ハンス二世」は主人の前に立って蹄で地面を打つが、二たす二はいくつと聞くと地面を四回打つといったように、加算ばかりでなく、掛け算も割り算も同じように正確な答を蹄で地面を打って知らせるので、たちまち利口な「ハンス二世」の名はドイツ全土に広まった。ハンスはまた地面にアルファベットのそれぞれの文字を適当な回数で示すことで語句や文章をつづることができたといわれるが、Rはアルファベットの一八番目の字であることを思い出すことは難事であるがハンスはこれができた。それでハンスは多くの子供たちよりも余ほどの知能があると結論することが可能となった。ところがプングストという動物学者が調査研究した結果、ハンスがこのような答を出すのは、問題に対する答を知っている主人がその場にいないとハンスが答えられないので、見かけはじっと立っていて答を待っている主人が、ハンスが答えるように無意識にサインを与えたに相違ないとして、主人とハンスとの間に壁布を立てて遮断したところ、ハンスは完全に力を失ったのである。そこでハンスはただ主人の微妙な表情や動作の変化に反応して地面を打っていたに過ぎないことがわかったのである。それにしてもハンスは非常に鋭敏な感覚の持主であったことがわかる。

モエケル夫人のロルフ

馬のハンスの話のあった後にドイツのマンハイム市のモエケル夫人の愛犬ロルフというエアデール・テリアがたいへんに問題になったこと

がある。ロルフの並々ならぬ知能を発見したのは夫人で、夫人が娘に「二と二でいくつか答えて御覧なさい」と算術を教えていた時に、偶然傍にいたロルフが眼を輝かして何か言わんとする様子を見せたので「そんなことぐらいはロルフだって知っているね」といったら、ロルフは立ちどころに前肢で床を四回叩いたので夫人は大いに驚き、それから熱心に数学を教えたところ犬はたちまち上達し平方根や立方根まで暗算で答えるようになった。またカードを用いてアルファベットからはじめて文字を教えたところ簡単な文字を訳なく綴れるようになり「お前は何か」と聞くと「犬」と答え、「ダックスフンドだって犬よ」というと「肢が違う」と答え会話ができたといわれている。しかしこれも利口な「ハンス」と同じように実はモエケル夫人の考え違いで、実験者が動物に無意識的な激励や援助を与えた結果であって、ロルフも多分非常に馴れ易く注意深い犬だったに相違ないが、数学ができたり、また会話ができるということではなかったのである。

わが国でも「学者犬」というのがあり問題を出されると数字を書いたカードをくわえて来て答えたり、また国の名を言えばその国の国旗をくわえて来て見物の拍手喝采をあびたことがあったが、これは見物に気付かれないように指導者が合図を送って、意識的に訓練した犬で、トリックがかくされている。

生物学者ロイド・モルガンは動物の行動を分析するときには、余り複雑に解釈することを戒めて、動物の心理は人の解釈できる最低の知能の表現であると考えた方がよいと過大評価を避け擬人化することを排斥しているし、またロシアの生理学者パブロフによる条件反射の理論以来いろいろな実験により犬の心理状態は、人より遙かに単純であることが明らかにされている。

〃ハチ公〃の周囲

　忠犬ハチ公が亡くなったのは昭和十年三月で、現在銅像のある渋谷駅付近の酒屋の路地であった。ハチ公は大正十二年秋田県北秋田郡の生れで死亡当時は一四才であったと推定されている。死因はフィラリア（心臓の寄生虫病）で腹水が二升五合もたまっていたといわれている。ハチ公の主人の上野教授は大正十四年五月教授会の席上で脳出血のため亡くなったが、同氏は愛犬家であったが犬の飼育が下手で、それまでに数頭の犬を亡くしたと伝えられている。ハチ公の銅像の原型は彫刻家安藤照氏により制作され、すでに昭和四年の文展に出品されて評判になったものであるが、ハチ公の亡くなる前年の昭和九年四月二十一日、全国の小中学生から寄せられた一銭二銭というお金でブロンズの像が渋谷駅頭に建立された。除幕式の当日老いたハチ公には花束が贈られたりして非常に盛会で、新聞紙上に派手に報道されたものである。しかしこの銅像も戦時中供出されて終戦の前日に国鉄の浜松工機部で溶解され、機関車の部品になってしまった。現在のものは戦後安藤氏の長男で同じく彫刻家の士氏により再建されたものである。

　渋谷駅は東京の山手の私鉄の巨大なターミナルを形成しているので、年がら年中たいへんな雑踏ぶりである。地下街の上にあるハチ公の銅像の広場へ来て見ると、ここでだれかを待合わしている人達が意外に多いことを知って驚くのである。なにしろこの銅像は余りにも有名なので、とかく起りがちな出会い場所の間違いが絶対に起らないからであろう。スラックス姿のティンエージャーや鞄を下げたブローカー風の男、ホワイトカラーのサラリーマンから葉巻を燻らした外人

忠犬ハチ公の銅像

まで雑多な人達が銅像の周囲に人待ち顔で立っているのが目に映るが、やがて彼等はだれかと挨拶を交しながら次々とハチ公の前から消えてゆくのである。

それにしても朝から晩まで、こんなに多くの人々の待合わせの目標にされている犬の銅像も世界にはあるまい。そこでハチ公もしなかりせば、いや彼が忠犬として世間に宣伝されなかったなら、ここに銅像など建立される筈がなく、多くの人々はさぞかし不便をかこつことと思われる。この意味からしても忠犬ハチ公の存在は実に偉大であるという考え方は決して皮肉ではない。大いに利用され感謝されてしかるべきである。

ひところハチ公が世に知られるに至ったいきさつについて、作意の有無が問題になったことがある。犬の記憶が九年も一〇年も継続する筈がないとか、あるいは普通のルンペン犬だともいわれたが、しかし主人なきあとも駅の出入りは自由で多くの乗降客に親しまれ、駅付近に定住して渋谷の名物になり、ついに生涯を駅付近で閉じたことは事実である。たとえ新聞記事に誇張があり、また当時の駅長がなかなかの宣伝マンであったにしろ、ひとしく動物愛護の精神なくして銅像は建立できるものではない。

「忠犬は世に掃いて捨てるくらいある。ただ他の犬は演出家に恵まれない環境にあったので目立たなかったに過ぎない」という無名の犬に同情する愛犬家の声もないではない。忠犬とは主人の命を忠実に守り信頼できる犬のことで、飼い犬としての義務に忠実なものはすべて忠犬のカテゴリーにはいるといってよい。従って帰らぬ主人を待つ犬だけが忠犬ではなくて、日夜わが家の番を忠実に務めてくれるポチでもハナでもひとしく忠犬である。

忠犬のカテゴリー

さて、わが国では「犬は三日飼えば一生恩を忘れない」などと古くから言伝えられている。しかしこれは犬が人によくなつく習性を現わしているだけで、犬が道徳的な報恩というような感性を持っていると考えたらたいへんな誤りである。戦時中、文部省は犬は恩を忘れない動物であるとして小学校の修身書に「恩を忘れるな」の題材のもとにハチ公を扱ったものである。犬を擬人化して、荒唐無稽にもモラリストにしあげ、本来の姿を著るしく歪めたことは否定できない。

だが犬が人類のよき伴侶であり、また怜悧で賢明な従者としての物語は、洋の東西を問わず数限りなく伝えられている。しかしイソップ物語を始めとして、犬の心理学の分野から分析すると妥当を欠くと思われるものも決して少なくない。「犬は推理し、弁証法を知っている」という聖ジイルや「犬は人間以上に理性を用いる」というロラリュースのように途法もなく飛躍した論理は眉唾もので「彼は鍋を知らない。汁をこしらえる鍋を……」と歌ったファウストの方が事実に即している。犬を勝手に擬人化して教訓的な意義を引き出そうとすればするほど、現実の犬を正しく理解させる障害となり、教育上むしろ有害であるといえよう。

犬と人間の年令

学者の説によれば二、〇〇〇年前の人の寿命は二〇才ぐらいだったそうである。犬も現在より遙かに短命であったと想像される。江戸時代の馬琴の随筆集「燕石雑志」には犬は五、六才で斃れるのが普通であるといっているが、現在ではときたま二〇才前後の犬を見ることもあり、かつて秋田県では二三才や二七才の犬の記録が残っている。

英国のウォルター・ハッチンソン氏の「犬の百科事典」に二〇才のもの数頭と二五才のものの二例を記しているが、さらにピーコック氏は三五才のエスキモー犬とコリーの二例を挙げている。もしこれが事実なら犬の長寿の最大のレコードであろう。一九五八年夏、東京へモスクワの国立ボリショイ・サーカスが熊と一緒に約二〇頭のホワイト・スピッツを連れて来たが、その中で幌のかかった救急車に乗ってステージに出て来る一頭の犬は「ミノツカ」という名前で、年令は一五才でソ連の展覧会で銀メダルを貰った犬だと調教師のラピアド夫人は私に語ったが、いかにも高令者らしく席に悠然と坐っていた姿がまことに印象的であった。

私は自分の経験から犬の寿命は普通一二才から一五才ぐらいでないかと思っているが、この年令に達せずに亡くなるものの数は夥しい。一般にフイラリア（心臓寄生虫症）のない地域の犬は比較的長命であるが、最近獣医学の進歩によって平均寿命も次第に伸びつつある。その一例を挙げればフイラリアの治療は戦後非常に進歩を遂げたし、また犬の大敵として最も恐れられていたジステンパーも免疫ワクチンによりこの難病の予防ができるようになり、愛犬家の大きな福音と

なっている。さらに各種の抗生物質なども治療面で高度に利用されつつあることは見逃すことができない。

長命の犬

然し犬の寿命も種類や体の大小によって必ずしも一様ではない。小型犬は大型犬に比して成熟が早くて小型テリアなどは生後一年ほどで成犬（大人になった犬）となるがセントバーナードのように体軀の雄大な大型犬は三年を要するといわれている。ところが成熟するために長い年月がかかるものは、早く成熟するものより長命であるという自然の法則とは逆に、犬は小型犬よりも大型犬が一般に短命なのである。ベルギーのスキッパーキ（小さな船長の意）と称する犬は船着場で船の番をするために用いられる犬であるが、長生をする犬として有名で一五、六才のものは非常に多く二一才ぐらいのものもあるといわれる。この犬は体重およそ八キロ以下の小型犬である。犬は健康管理の良否によって寿命が著るしく伸縮する。この点小型犬に属するものは愛玩犬が多く、大半は室内や主人の身辺に飼育されている関係上注意がよく行届くばかりでなく、寒暑等の天候の影響をあまりうけないで済む。また大型犬のごとく労働や使役を目的として飼育されないので、無理を強制されることがないことなどが原因するものと思われる。これとは反対に頑健な体軀の持主と考えられる使役犬は案外に平均寿命が短いので、犬も人と同じく見かけによらないものである。

犬と人間との比較

犬の年と人の年令を比較して、人なら何才に匹敵するか推定する方法は古くからあったが面白いことには時代により異なり定説はない。江戸時代の百科事典といわれる「和漢三才図会」には犬の一才は人の一〇才に当り一〇才を越えるものは稀

だと述べている。即ち一〇才説がこれであるが犬の平均寿命の短い時代としては当然であろう。この説では一二才の犬は一二〇才となり今日の人の年令と合致しない。英米やヨーロッパ諸国にも犬と人の年令比較の定説はないが、一般にワン・ツー・セブン・ルール（One-to-Seven Rule）即ち犬の一才は人の七才に相当するという説が信じられている。近着の米国のドッグ・ワールド誌でも「一四才の犬は人の一〇〇才に相当する」などと述べている根拠もここにある。

しかし同じ米国でもクロス氏やソンダース氏は七才説は有力なセオリーではあるが、これに反対だとして次の如く述べている。「犬の一才は人の一六才に、また二才は人の二四才、三才は三〇才で、四才以降は犬の一才は人の五才に相当する」

この説の特徴は三年までは基本年令を加え、翌年より一才毎に五才を加算するので、機械的な七才説より遙かに合理的な計算法である。最近人の平均寿命が次第に伸びて来て米国では平均男は七〇才、女は七四才となっているが、この計算方法によると次の如く一二才の犬は人の七五才に相当することになる。

犬の年令	人の年令	犬の年令	人の年令	犬の年令	人の年令
一才	一六才	四才	三五才	九才	六〇才
（一才半	二〇才）	五才	四〇才	一〇才	六五才
二才	二四才	六才	四五才	一一才	七〇才
（二才半	二七才）	七才	五〇才	一三才	八〇才
三才	三〇才	八才	五五才	一五才	九〇才（長命）

リン チン チン物語

カリフォルニアの農場主リー・ダンカン氏は第一次大戦に出征した軍人であるが、ドイツが降伏する間近に同氏の所属部隊が、ドイツ軍基地を占領した際、破壊された軍用犬の犬舎の中で、まだ眼のあかない可愛い二頭のシェパードの仔犬を発見してキャンプに持帰り、ミルクで育て〝ナネット〟と〝リンチンチン〟と名付けたのである。このドイツ生れの二頭は凱旋とともに、米国に持帰られたが、不幸にも〝ナネット〟は肺炎で亡くなった。ダンカン氏は農場でリンチンチンに最大の愛情を傾けて育成しまた訓練することを怠らなかったと伝えられている。一九二三年ワーナーブラザーズ社と契約して映画に初出演しその後二〇本の映画を撮ったが、非常に評判がよくお陰でこの映画会社は赤字を精算することができたといわれる。一九三二年リンチンチンは惜しまれて世を去ったが、その子の二世は怜悧で一世に負けない秀れたシェパードであった。第二次大戦中ダンカン氏は陸軍K９部隊で軍用犬の訓練に当ったが、その数は五、〇〇〇頭に達し、二世はこのころもう引退していたのである。三世は祖父によく似てすばらしい演技を見せたが一九五一年に亡くなり、当時ダンカン氏は農場で犬とともに自適の生活を楽しみ映画界から退いていた。然し名犬を後世に残すことを忘れず、やがて四世の時代になってテレビに登場することになり、始めてＡＢＣ放送の電波に乗ったのである。そしてこれがわが国にもすっかりお馴染のリンチンチンとなったのである。犬とともに生きたダンカン氏は一九六〇年亡くなったが、同氏なき後は令嬢キャロリンさんに引継がれて、今後も五世六世が登場することとであろう。

テリアの話

テリア（Terrier）というと一般に小型で愛くるしい犬を表現するように思われていて「まるでテリアのようだ」などとよくいわれることがある。

もっとも米国では小型でスマートなミサイルにテリアという名称がつけられてはいるが、これは必ずしもテリアの本質をそのまま表現したものといえない。

そもそもテリアという英語はラテン語のテラ（Terra）から来たもので「土を掘る」ことを意味している。したがってテリアと称される犬たちは、その一般的習性として地面に穴を掘り、土中や岩穴に生息している野鼠、狸、狐、テン、モグラ、野兎、カワウソなどの小害獣を狩るために盛んに用いられた犬に与えられた普遍的な名称にほかならない。テリアのグループに属するものは二三種を数えることができるが、エアデール・テリアを除いてはたしかに小型のものが多く体高三八糎ぐらいのものがその中心をなしている。これはテリアの本質からいっても大きなものは本来の目的に適しないことを物語っている。またテリア種に共通した特質はテリア・キャラクターと呼ばれ、鋭敏な感覚とキビキビした敏捷な行動と大胆な気魄、それに加うるに彼等の聰明さがよく気質の上に現われているが、ここに小害獣駆除犬であった面影を未だに留めているといってよい。テリアの原産国はイギリスで、濠州のオーストラリアン・テリアも祖先はイギリスより渡ったものである。テリアは短脚テリア（ケアンテリア、スコティシュテリア等）と長脚テリア（エアデールテリア、フオックステリア、ブルテリア等）の二つに大別される。

カラフト犬

カラフト犬の良系のものは北海道でもいたって少ない。戦前はカラフトのシスカ（敷香）地方に多く飼育されていた地犬で厳密には固定された純粋犬種ではない。恐らくカラフトアイヌやオロッコ、ギリャークなどの原住民が沿海州より移住した際に一緒に渡ったものと想像されている。系統的には橇犬として世界的に有名なハスキー種、エスキモー種、マラムート種などと同じく北方犬族に属し、宇宙犬ライカとも近縁関係にある。カラフト犬は毛の長さにより短毛種（五糎）と長毛種（一四糎）の二種に大別されるが長毛種は耐寒性が強く零下四〇度のきびしい寒さに耐えるので極地向である。性質は温順で体高五八糎、体重四、五〇キロに達するものもあるが、それよりやや小型のものもある。毛色は白、黒、灰褐色、白黒の斑などがあり、立耳で巻尾が多く筋骨逞しく趾は強靱で長距離の氷原を橇を曳いて走るのに全く適している。

南極の昭和基地に活躍した犬は戦時中に軍が北海道に連れて来たものの子孫や、道内で雑種化したものの中から選ばれたものである。これ等のカラフト犬は魚屋、牛乳屋、豆腐屋、八百屋などが軽量物の運搬等に使用していたもので、第一次南極観測隊生き残りの「タロー」「ジロー」は同腹の兄弟犬で小犬の時は稚内の魚市場でセリ売りに出されたことがあったといわれている。

カラフト犬の南極への置いてきぼりは昭和の南極観測隊がはじめてではない。明治四十五年四月白瀬探検隊は天候の激変から、それまで辛苦を共にした二〇頭のカラフト犬に干鱈一俵を投げ与えたのみで吹雪に包まれたロスの氷壁上に置去りにして命からがら開南丸に乗移り凱旋してい

るのである。これと対照的なケースは昭和三十三年三月南極横断に成功したイギリスのフックス隊であろう。彼等は想像に絶する困難に遭遇し、ついに一四四〇キロを走破して極点に達するや、救助に飛来した航空機にまず疲労しきった犬橇隊の全犬を収容して送還した後に、さらに彼等は雪上車で二、〇〇〇キロを走破し、スコット基地までの最高の記録を打ちたてたのである。

犬が極地探検に不可欠の要素となっていることは極地探検の歴史をひもとくまでもないが、米国のペアリーは五台の橇と三八頭のエスキモー種を使用したし、アムンゼンはたぐいまれなる愛犬家で橇犬の研究を怠らず一二〇頭の犬の一頭一頭について個性を調べあげるほど犬を重視した。あの輝かしい偉大なる業績のかげに犬の大きな貢献があったことを忘れてはならない。

カラフト犬

今日でも極地の輸送力として航空機は天候と不時着の際の安全に不安が伴う。雪上車は非常に進歩したが故障やクレバス地帯の行動不能を考慮しなければならない。犬橇は通常七、八頭がロープにつながれているのでパドルに落ちても心配はないし、犬の鋭敏な嗅覚や方向感覚がどれほど役に立つか計り知れないものがある。従って犬の能力と雪上車の機動力を併行的に利用するのが原則となっている。

やさしい飼い方

家畜動物は野生動物より飼い易く、特に犬は太古より人類に飼い慣らされてきたので、その飼育は他の家畜動物よりははるかにやさしくて、それがまた犬の特徴となっている。

犬の選び方

すでに述べたように犬には非常に多くの種類があり、それぞれ特性が違っているとともにからだの大きさも異なっているし、さらに被毛の長短や毛色と斑などがいろいろに組合わされて、それぞれ独自のタイプと特異な雰囲気を醸し出している。これは飼育以前の問題であるが、人々には犬に対する好みがあって、グレートデンや秋田犬のような大型犬を好む人もあれば、ポメラニアンやチワワのような小型犬を、あるいはモルチーズのような長毛種より手入れの楽な短毛種がよいという人もあり、それこそ人さまざまである。

しかし金魚や熱帯魚などとちがって単に好みで犬の種類を選ぶことは危険であり、また流行は必ずしも選択の基準にはならない。それよりもたいせつなことはわが家に向く犬を選ぶことである。庭の広い邸宅には大型犬が向き、庭先の狭い小住宅やアパート生活者に小型犬が向いていることはいうまでもない。また大型犬は食餌の量も多いので飼育費がかさみ運動もつけてやらねばならないが、小型犬はその点は逆で経常費が少なくすむ。次に飼育目的に合致した特性をもつ犬を選ぶべきで、たとえば狩猟用には猟犬でなければならないように、目的により番犬、使役犬、愛玩犬などの種類があるわけである。要するに犬の種類も条件次第で、このようにして選ばれた犬種の中から自己の好みに合うものを最後的に決めるのが順序であろう。

食餌

野生時代の犬は自己の好む食物を自由に探し歩いて摂っていたが、今日の家犬は飼主によって与えられるもの以外は摂ることができないので、与えられる食物が合理的でないと犬の健康はたちまち損なわれるおそれがある。犬は動植物性の雑食動物で、米飯またはパンに煮魚か獣肉のような動物蛋白質を混じえたものを主体に、野菜汁などで適当に湿り気を加えてやるのが最も一般的な食餌となっている。しかし犬は嗜好的に獣肉を好むが、動物性食品は五〇〜七〇%、植物性食品三〇〜四〇%くらいの割合がよく、栄養素のバランスは成長の度合にもよるが、およそ蛋白質二〇〜二五%（うち動物蛋白質は七〇%）、炭水化物四五〜六〇%、脂肪五〜九%くらいが最も合理的な配合であるとされている。

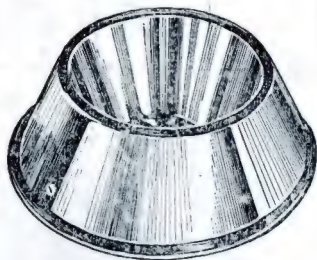
動物性食品は牛、豚、馬、羊などの屑肉や内臓肉、鯨肉なども用いられるし、また魚のアラなどは煮ても焼いてもよく食べるが、イワシのように脂肪の強いものは、湿疹の原因になるのでサッと煮て油を捨ててから与えた方がよい。その他に鶏卵、牛乳及び乳製品は栄養価が高いので、しばしば用いられる。植物性食品はパンが最も消化がよく八〇%近くが消化され、ウドン、米飯はこれに次ぐが大麦は消化が悪く、生野菜やビタミンCは犬の生活にほとんど必要がないとされている。

犬は汗線が退化しているため調理に当たっては味付は極く薄味にしてやり、胡椒や辛子のような刺戟物は禁物。獣肉の内臓は高圧釜で煮ると柔らかくなり消化によい。食餌の量は犬の大きさにより区々であるが、与える回数は仔犬は胃の容積が狭くて腸の発育が遅れているから、回数を多くして一回の量を少なく与えるのが原則で、生後二〜三カ月は一日に四〜五回、四〜六カ月は

三～四回、六カ月～一年未満は二～三回、一年以上は一～二回でよい。また発育期の仔犬には成犬（大人になった犬）の二倍のカロリーが必要で栄養価の高い食品を与えるとともに、骨格形成のために骨粉やカルシウム剤とビタミンＡＤ（肝油）を与えてやらねばならない。なお水分は犬体の三分の二を占めているので水分を与えないで犬の生命は保てない。したがって水は必要な時にいつでも飲めるよう用意してやる必要がある。

最近犬の食物にドッグ・フードが盛んに用いられるようになった。ドッグ・フードは犬が必要とする栄養素をバランスのとれた配合にして、各種のビタミンやミネラルを加えて製造したもので、罐詰と乾燥したビスケットまたは粒状（ペレット）フードの三つのタイプがある。フードは欧米では一般的な食餌として広く利用され、品質の非常に優秀なものが市販されている。わが国にも発売されているが、犬の飼養を調理の煩わしさから解放してくれるので、飼育がたいへんにやさしくなったことは事実である。そこで在来の食餌と交互に与えるようになりつつあるが、やがてわが国にもフード、オンリーの時代が訪れるであろう。次表は最近の研究による犬の必要とする一日の栄養素量である。

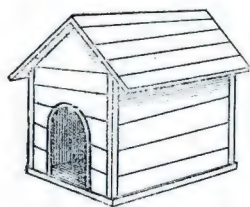
ステンレス製の食器

犬舎　犬舎は風雨または寒暑等の天候から犬のからだを保護するために作られた犬の住いのことであ

犬の必要栄養素（体重1ポンド当り1日量）

項　　　目	犬の体重	成　犬	幼　犬
必要エネルギー（カロリー）	5ポンド	50	100
	10	42	84
	15	35	70
	30	32	64
	50以上	31	62
蛋白質最小限（g.）		1.7	4.5
炭水化物（g.）		8.0	14.7
脂肪（g.）		0.6	1.1
カルシウム（mg.）		120	240
燐（mg.）		100	200
鉄（mg.）		0.600	0.600
マグネシューム（mg.）		5	16
塩化ナトリユーム（mg.）		170	200
カリウム（mg.）		100	240
ビタミンA（I.U.）		45	90
ビタミンD（I.U.）		3	9
ビタミンB_1（mg.）		0.008	0.015
ビタミンB_2（mg.）		0.020	0.040
ビタミンB_6（mg.）		0.010	0.025
コリーン（mg.）		15	25

る。したがって室内で飼われている小型愛玩犬には必要はなく、ただ廊下の偶などの一定の場所に寝床を作ってやるか、または必要な時に収容できる小さな犬箱を備えれば十分である。

屋外飼育の犬は庭を金網で仕切り、そこに移動犬舎を置くのが普通である。

犬舎は正面に入口のある木製の高さ七〇〜八〇センチの箱で、屋根の取りは

ずしができて掃除に便利で季節により適当な場所に移動できるが、風雨が吹込み易くて蚊の侵入を防ぐことができない欠点がある。一戸建の独立した固定犬舎は理想的であるが、納屋を改造したりまた塀や母屋の片側を利用して作れば安あがりである。建物の前面を運動場にしてコンクリートで固め金網で囲むが運動場は広ければ広いほどよい。通常一、二頭ならば一坪か二坪でよく、湿地を避けて日当りのよい場所を選び、床を高くして南北の窓を大きくあけ夏は北風を入れて涼しく、冬は北窓を密閉する構造でなければならない。犬は寒さよりも暑さに対する抵抗力が弱いので涼しくしてやるために運動場に木かげを作ってやり、また窓には防蚊金網を必ず張ってやらねばならない。また部屋の一偶に寝箱を置き冬はわらをたくさん入れて暖くしてやるようにする。

運動と手入れ

家畜化されない前の犬は山野を自由に歩きまわって運動をしていたが、今日の家犬は野良犬以外は自分の意志で行動ができない。それで狭い運動場で飼ったり、鎖で繋いでおくと運動が不足するので、ときどき戸外に連れ出して運動を補ってやらないと健康を害する。運動は血液の循環を旺盛にして新陳代謝を盛んにし、食欲は増進するとともに筋肉を鍛錬し健康が増進されるが、不足すると筋腱は萎縮し新陳代謝の衰えから諸臓器の機能は減退し、動作は不活発となり神経ばかりたかぶり、いたずらに喧噪となり、人に噛みつき易くなるので適当な運動をさせてやらねばならない。

運動の量とその方法は犬の大小、年令により異なるが、小型犬は少

木製の移動犬舎

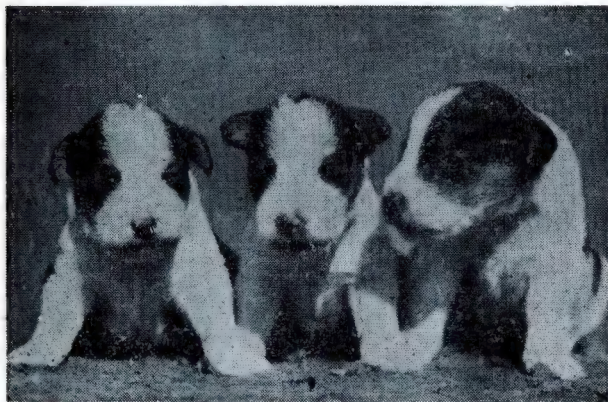
なく大型犬は多くさせ、また幼犬や老犬に無理な運動をさせてはならない。犬は汗線が退化しているので人のように発汗して体温を調節する機能が減退し、呼吸によって調節を計るので、運動をすると口を大きく開け涎れを流してハアハアと呼吸が荒くなる。それで運動中は物品をくわえさせてはならない。一般的にいって小型愛玩犬は戸外運動の必要はなく、フォックステリアやスコティシュテリアなどは二〇分くらい散歩のお伴が適当である。中型の大きさのシェパード、コリー、ボクサーなどは自転車運動が適し、トロットで朝夕二〇分くらいずつ走らせた方がよい。また大型犬に属する秋田犬や土佐犬、セントバーナードなどはゆっくり歩く徐行型の犬なので自転車運動は適せず、朝夕一時間ずつ連れて歩かねばならない。運動後は水を与え休息させて呼吸が元に戻って平静になってから食餌を与える。

犬の手入れはほとんど被毛の手入れといってよく、被毛はいつも清潔で美しい光沢に輝いているようでなければならない。被毛は毎年晩春のころに脱落して徐々に夏毛に更新され、秋から冬に向かって漸次夏毛は伸びてゆき防寒のための外套の役目を果たすのである。自然に脱落した毛がからだに付着していると、ちょっとなでても手に付着したり、また室内犬の毛が部屋に散乱しているのは不愉快なので、毎日手入れを怠ってはならない。手入れ具はブラシと金櫛でよいが毛深い犬種には毛ガキを用いる。ブラシは抜毛や付着している皮垢や塵を取り去るばかりでなく、皮膚を摩擦して血行をよくし新陳代謝を盛んにする。また金櫛は被毛のもつれを解き毛並を整え抜毛を取去るために必要であるが長毛種には目の荒いものがよい。バリカンや鋏などは犬の姿を整える理容のために使用される。ダックスフンドやボクサーのような短毛種には櫛は必要がなく

ブラッシングだけでよく、その後にビロードの布切れで拭くと毛艶が美しくなる。

犬体が汚れたり、悪臭のある時は入浴させねばならないが寒い季節は風邪をひかせないように注意し、早く乾燥させるためにヘアー・ドライヤーを使用するとよい。ノミの駆除にDDTやBHC剤のはいった薬品を使用する際は、なめたり吸引したりすると副作用があるので注意しなければならない。

繁殖

牝犬は生後九～一二カ月で最初の発情期が訪れる。しかし普通はまだからだができあがっていないので次の発情期まで交配を見送った方がよい。牝犬の発情周期は年二回で春秋の季節が最も多い。牡犬には牝犬のような発情期はなく、からだが成熟すれば発情した牝犬といつでも交配ができるのである。発情期の牝犬の交配適日は最初の出血があった日より数えて一〇～一四日目ごろがよく、すなわ

眼をあいたばかりのワイアの仔犬

	脂肪	カゼイン	アルブミン	糖分	灰分	水分
犬　乳	10	6	5	3.1	7	75.2
牛　乳	3.7	3	0.5	5	7	87.1
山羊乳	5	3.2	1	4.5	7	85.6

ち濃い出血が透明がかって薄くなった時である。犬の妊娠期間は凡そ六三日であるが多少のズレがある。

仔犬が産れるとすぐに母犬の乳房にすがりつくが、生後三週間くらいまでは母犬につけておくだけでよい。仔犬の栄養は母乳を通じて与えられるので母犬には消化し易く栄養価の高いものを与え水分が少ないと乳量が減るから、牛乳やスープなどを多く与えるようにして、カルシウムやビタミンＡＤも補給してやらねばならない。母乳の成分は上記の通りであるが、もし母乳が不足した場合には牛乳は犬乳より栄養価が劣るので、牛乳を土台にして足りない栄養素を添加して与えねばならない。それには卵黄や粉乳が適当している。

仔犬は最初盲目であるが生後九〜一二日の間に眼が開く。狼爪や前肢の第一趾の切除は断尾と同じように生後一週間以内に行なうのがよい。また乳歯の発生は生後三週間前後に門歯より始まり、約五週間目ごろに終るが、乳歯の発生はそろそろ給餌を始めてもよいことを示すもので、四週間目からなまの牛のひき肉かあるいはおじやのようなものを与え始めてもよい。そして六週間目に離乳させる。離乳後はトーストパンを牛乳にひたしたものや、魚肉または鶏卵、牛のひき肉などを与え、便の固さをみながら量を調節してゆくのが、仔犬を上手に育てるコツである。そして生後六〇日ごろが仔犬の分譲に最もよい時期である。

躾け

訓育の開始が遅れてはいけないと同様に訓育を中止してはならない。なぜならば中止をすると怠け癖がつき悪習にそまる怖れがあるからである。訓育開始は早いほどよい。すなわち生後二カ月目ごろより母の乳房を忘れて飼主への絶対の信頼を捧げるこのころによい躾けの訓育にとりかかる。訓育にとってたいせつなことは主人との親和で、決してあせらず根気よく教え込み毎日短時間ずつ始めないと、仔犬はすぐ厭きてくる。まず「坐れ」「来い」「持って来い」などを教えるが一つをマスターしてから次に移らねばならない。そしてつねに賞罰を明らかにして、よくないことをしたら叱り、その反対に命令に従ったら賞めてやるが、叱る時は行為の直後でないと犬はなんのために叱られているのかとまどうから効果がない。

病気

犬は伝染病を予防してやり、寄生虫を駆除してやれば健康に育つもので、病気をさほど怖れることはない。まず腸内寄生虫であるが、これが寄生すると下痢便や血便を排泄し、栄養不良となり被毛の光沢は失われ貧血状態となり、被害は甚大で特に仔犬は著しい。腸内寄生虫のおもなものは蛔虫、条虫、十二指腸虫（鈎虫）鞭虫等で、これらの寄生の有無は糞便検査により顕微鏡下に虫卵を認めることにより知ることができる。獣医師により検便をして貰ってそこに寄生している虫に適当な虫下しをかけてやらねばならない。犬に最も多い蛔虫にはピペラジン剤が毒性が少なくて下剤もいらずよく奏効する。仔犬にはシロップが用いられる。また条虫にはカマラ、テノバン、バルチンなどがよく、十二指腸虫にはベルミプレックス、鞭虫にはウイップサイドなどの薬品がよい。

犬の心臓寄生虫であるフイラリア症は蚊に刺されることにより感染するので、夏季には犬舎に

金網を張り予防してやることはもちろんであるが、しかし蚊に絶対に刺されないようにすることはまず不可能なので、一夏過ぎたらジチアザニン剤かアンチモン剤を注射して、心臓に寄生する前に仔虫を死滅させてしまう必要がある。犬の大敵といわれるジステンパーは病犬のウィルスの伝染により発病するもので、流行性肝炎や硬蹠症もジステンパーの類似疾患である。これらの伝染病は今日では混合ワクチンが完成しているので生後二、三カ月後に一回、その後一年を経過してから更にもう一回注射して免疫にして予防しておけば安全である。また原生物が肝臓や腎臓に寄生して起こるレプトスピラ症もジステンパーとの混合ワクチンが発売されているから、これを注射して予防するのが常識である。

このように伝染病は今日では治療より予防の方向に向かいつつあり、それもワクチンが完成されたからにほかならない。その他皮膚病などがあるが、犬の病気の診断と治療は獣医師の分野で素人が手を下さない方が安全である。病気の早期発見に心がけ、異状を認めたら直ちに専門家に診て貰わねばならない。

狂犬病は文明国の恥といわれるが、わが国はこの危険性が皆無ではないため、法律により定められた狂犬病予防注射を年二回春秋に必ず行なって、放し飼いは絶対に止めねばならない。

カラー写真の犬名一覧表

1. アンナ　ド　ルパン
4. グランデアダボード　オブ　ソフィア
5. ヒルス　ボニーボーイ
6. ムーツ V. d.　モルゲンゼー
8. Alma v. Grünen Wald
9. マジョリカ　マジックフラワーはか
11. ロイアル　オブ　ミッテルフルス
12. Sugarbrook Sy nbol (A. CH.)
14. Silver Maple Mister Hunter (A. CH.)
15. Banger's North Echo (A.CH.)
16. Iraquois Casanova (E. CH.)
19. Everserve Rolf
21. イルビフィールド　アグレス
22. Sanctuary wood's Just Because
24. アミー　オブ　レディアーサー
25. Eastgate Crusador (E. CH.)
27. アド　オブ　ナマタメ
28. Yerna de Fontenay
29. ビスマルク　オブ　セイジョウ
31. グランデアキングコート　ドニス
32. バロン　オブ　ブルースカイ
33. カノオール　ヴアガボンド
34. Von Der Hellenis Scotchin Soda (A. CH.)
36. Sir Ree Bob of Buffington (A. CH.)
39. エドワードボイヤー　オブ　ゴールデンスター
40. Wyretex Wyns Wunderfull (E. CH.)
42. パトリシア　プラムスプリングス
43. チップ トップ セレブリティ
45. Reanda Ribot (E. CH.)
46. Reanda Roystar (E. CH.)
49. Sucot's Apollo (E. CH.)
51. ピクニック ヴァリー キャプテン キッド
52. タイホン
53. ピノピュウ　レミー
54. Fine Ladys of Small Deluxe
56. ピッコロ V. カタオカ
57. Wilder's Corky (A. CH)
59. Tack of Topaz
60. Corkies Golden Glow Topper (A. CH.)
62.
63. 逸三郎 (左)　ハマ号 (右)
64. 春風号 (日保 CH.)
65. 良助号
66. 栃号 (日保 CH.)
67. 玉華号
68. 伊吹号

注　A. CH はアメリカチャンピオン，E. CH. はイギリスチャンピオン，日保 CH. は日本犬保存会チャンピオンのそれぞれ略。

大野淳一（おおのじゅんいち）

1911年新潟県に生まる。日本エアデールテリア協会，日本オールテリア協会常務理事を歴任，現在総合犬種団体日本カナインクラブ理事長。
≪著書≫「犬の飼い方」(大泉書店)，「テリアと愛玩犬」(朝倉書店)，「Japanese Dog」(NHK国際局)
≪現住所≫ 東京都世田谷区玉川奥沢町2丁目253

カラーブックス 3）　犬 ―その名柄―　　定価 280円

昭和37年4月20日 初版発行　昭和46年3月1日 14刷発行

著者 大野淳一　発行者 今井龍雄　発行所 株式会社 保育社
540・大阪市東区内久宝寺町1の20 電話(06)762-1731(代) 振替口座 大阪 12346
東京出張所／110・東京都台東区台東4丁目7　電話 (03) 833-4071 (代)
印刷／宝文社印刷株式会社／大谷印刷株式会社／用紙／日本加工製紙株式会社

万一落丁・乱丁のときはお取り替えいたします。

70. 大阪 昔と今・三品彰英編
71. やきもの風土記・崎川範行著
72. 歌舞伎・戸板康二・吉田千秋共著
73. エジプト美術・近藤不二著
74. ヨーロッパの味・辻静雄著
75. デザイン・小池新二著
76. 洋らん・服部慶俊・狩野邦雄共著
77. 現代建築・藤木忠善著
78. 世界のきもの・田中薫・田中千代共著
79. 武蔵野・大竹新助著
80. 香水・堅田道久著
81. 熱帯性海水魚・牧野信司著
82. 新しい東京・永井保著
83. 抽象絵画・乾由明著
84. 日本の祭・芳賀日出男著
85. 東北の温泉・安斎秀夫著
86. ゴルフ・石角武夫・石角彰男共著
87. ヨーロッパの旅・辻静雄著
88. 奥の細道・大竹新助著
89. 自動車I・宮本晃男著
90. アメリカの旅・本田一二著
91. 水石・村田圭司著
92. 世界のコイン・藤沢優著
93. 新しい庭・龍居竹之介著
94. 京都―文学散歩―・駒敏郎著
95. 盆栽・村田憲司・村田圭司共著
96. ステレオアルバム・柴田仁著
97. 万葉の植物・松田修著
98. ロシア文学のふるさと・木村浩著
99. 家庭園芸I・浅山英一著
100. 新しい宝石・菅原通済著
101. 海釣り・永田一脩著
102. 上高地・布施正直著
103. 日本の博物館・三杉隆敏著
104. 能・丸岡大二・吉越立雄共著
105. 平家物語・門脇禎二著
106. 空から見た日本・堀田清陽・佐々木敦朗共著
107. 家庭園芸II・浅山英一著
108. カラーABC・稲村耕雄著
109. 飛行機・宮本晃男著
110. 世界の大学・本田一二著
111. 仏像―そのプロフィル―・青山茂・入江泰吉共著
112. きもの・井上愛子著
113. 京の寺・岡部伊都子著
114. 東南アジアの旅・石井出雄著
115. 京の味―名所とたべもの―・岩城もと子著
116. 詩歌のふるさと・大竹新助著
117. フラワーデザイン・マミ川崎著
118. 日本の大学・矢島文雄著
119. 茶道入門・井口海仙著
120. 奈良の寺・駒敏郎著
121. サボテン園芸・石田重雄著
122. 大和路の石仏・入江泰吉・[illegible]共著
123. 日本の名菓・鈴木宗康著
124. 駅弁旅行・石井出雄著
125. ペット―その種類と飼い方―・牧野信司著
126. テーブルマナー・石倉豊著
127. 世界のミニカー・中島登著
128. 新しい熱帯魚・牧野信司著
129. ヨーロッパドライブ旅行・玉井勝美著
130. 武蔵野の石仏・加藤薫著
131. カラー歳時記"虫"・串田孫一・浜野栄次共著
132. ばら・高嶋四郎著
133. 船の旅瀬戸内海・徳山静子他著
134. 食べられる野草・辺見金三郎著
135. カラー歳時記"鳥"・黒田長久他著
136. 鎌倉の寺・永井路子著
137. アクセサリー・竹久みち著
138. 巡礼の寺・三浦美佐子・小川光三共著
139. 油絵入門・伊藤[illegible]郎著
140. 名画に見る世界の裸婦・山川清・沢野井信夫共著
141. カラー歳時記"花木"・松田修著
142. 小住宅・井手正雄著
143. 大阪の味・佐藤行也著
144. カラー歳時記"草花"・松田修著
145. 暮らしの色彩・神戸文子著
146. 神話のふるさと・加藤蕙著
147. 版画入門・徳力富吉郎著
148. 京都―ガイド―・出雲路敬和著
149. 日曜大工・木村鉄雄著
150. 日本の魚・末広恭雄著
151. 尾瀬の四季・布施正直著
152. 蒸気機関車・広田尚敬著
153. 庭づくり・中根金作著
154. 洋酒入門・吉田芳二郎著
155. 西洋やきもの風土記・崎川範行著
156. 季節の料理・清水桂一著
157. 日本の貝・波部忠重著
158. 四国遍路・西村望著
159. 錦鯉・鳳木健夫著
160. 東京の味・添田知道編
161. 京都の年中行事・臼井喜之介著

162. 日本画入門・西山英雄著
163. 奈良の年中行事・入江泰吉・青山茂 共著
164. 民芸入門・吉田璋也著
165. 愛玩犬・大野淳一著
166. 岬 ―文学と旅情―・宮崎修二朗著
167. 花壇づくり・脇坂誠著
168. ハワイ ―ガイド―・早坂浄著
169. 北斎富嶽36景・菊地貞夫著
170. 皇居新宮殿・徳川義寛著
171. 人形劇入門・南江治郎著
172. 世界の味・保育社編集部編
173. 北陸能登・駒敏郎著
174. 海べの動物・鈴木克美著
175. 刀剣・小笠原信夫著
176. ドライフラワー・ヤスダヨリコ著
177. 染色入門・佐野猛夫著
178. 山陰 ―歴史と文学の旅!―・宮崎修二朗著
179. グッピーの魅力・牧野信司著
180. 法隆寺・入江泰吉・寺尾勇 共著
181. 国会・久保田富弘著
182. こけし・山中登著
183. 名画に見るキリスト・田中忠雄・田中文雄 共著
184. 佐保路の寺・入江泰吉・門脇禎二 共著

185. 県花県木・松田修著
186. 新しい大阪・保育社編集部編
187. 楽器・皆川達夫著
188. 室生路の寺・村井康彦・入江泰吉 共著
189. 自動車Ⅱ・宮本晃男著
190. 名作の旅川端康成・巌谷大四著
191. 飛鳥路の寺・杉本苑子・入江泰吉 共著
192. おもと入門・榊原八朗・田中直樹 共著
193. スタミナ料理・清水桂一著
194. 絵画に見る日本の美女・中村渓男著
195. 飛驒高山・加藤蕙著
196. 花ことば・引田茂著
197. 漢方薬入門・難波恒雄著
198. おりがみ・河合豊彰著
199. 紙の手芸・エキグチクニオ著
200. 薬師寺・唐招提寺・永井路子・入江泰吉 共著
201. 日本の蝶・世界の蝶・日本蝶類愛好会編
202. クラシックカー・石井出雄著
203. いけばな歳時記・中山尚子著
204. 興福寺・小西正文・入江泰吉 共著
205. 名作の旅夏目漱石・夏目伸六著
206. 墨画入門・内山雨海著
207. 人相学入門・八木喜三朗著

208. 東大寺・青山茂・入江泰吉 共著
209. 大和路文学散歩・駒敏郎著
210. 世界の船・野間恒著
211. スキー入門・中沢義直著
212. 古墳・森浩一著
213. 柳生の里・邦光史郎・入江泰吉 共著
214. インテリア・田中健三著
215. 名作の旅太宰治・大竹新助著
216. 日本の切手Ⅱ・山根重次著
217. さつき入門・沖田好弘著
218. コーヒー入門・佐藤哲也著

＊世界の学者から賞賛されている

原色図鑑〈A5判〉・大図鑑〈B5判〉・分類別もくろく

〈46．2現在〉

細字番号は　原色図鑑（例3.）
太字番号は　原色大図鑑（例**3.**）
＊印は改定定価、その他順次定価が改定されますのでご諒承ください。

植　物

✣園芸植物

＊11. 原色薔薇洋蘭図鑑　二一〇〇円
＊9. 原色花卉図鑑（上）　一八〇〇円
＊10. 原色花卉図鑑（下）　一八〇〇円
＊33. 原色園芸植物図鑑（Ⅰ）　一九〇〇円
＊34. 原色園芸植物図鑑（Ⅱ）　一九〇〇円
＊35. 原色園芸植物図鑑（Ⅲ）　一九〇〇円
＊36. 原色園芸植物図鑑（Ⅳ）　二一〇〇円
＊37. 原色園芸植物図鑑（Ⅴ）　二三〇〇円
＊29. 原色果実図鑑　一九〇〇円
＊40. 原色日本野菜図鑑　一八〇〇円

✣草本類

＊15. 原色日本植物図鑑（上）　二三〇〇円
＊16. 原色日本植物図鑑（中）　二五〇〇円
＊17. 原色日本植物図鑑（下）　二八〇〇円
＊**12.** 原色日本高山植物図鑑　二〇〇〇円
＊28. 続原色日本高山植物図鑑　一九〇〇円
＊39. 原色日本薬用植物図鑑　二一〇〇円
＊**11.** 原色日本植物生態図鑑（Ⅰ）（水平分布・垂直分布編）　二四〇〇円
12. シッキム・ヒマラヤの植物　二八〇〇円

✣木本類

＊19. 原色日本樹木図鑑　二三〇〇円
＊**10.** 原色木材大図鑑　三〇〇〇円
＊49. 続原色日本植物図鑑（Ⅰ）　近刊
＊50. 続原色日本植物図鑑（Ⅱ）　近刊

✣菌類・藻類・羊歯植物

＊23. 原色日本菌類図鑑　二一〇〇円
42. 続原色日本菌類図鑑　一九〇〇円

岩石・鉱物・その他

＊18. 原色日本海藻図鑑　二一〇〇円
＊24. 原色日本羊歯植物図鑑　二三〇〇円

✣岩石・鉱物・化石

＊13. 原色岩石図鑑　二〇〇〇円
＊14. 原色鉱石図鑑　二二〇〇円
＊31. 続原色鉱石図鑑　二三〇〇円
＊48. 原色化石図鑑　二四〇〇円

✣その他

＊**9.** 原色世界衣服大図鑑　二六〇〇円

動物

✣魚貝類

- *5. 原色日本魚類図鑑 二〇〇〇円
- *26. 続原色日本魚類図鑑 二〇〇〇円
- *32. 原色日本淡水魚類図鑑 二三〇〇円
- *20. 原色熱帯魚図鑑 二〇〇〇円
- *27. 続原色熱帯魚図鑑 二〇〇〇円
- *4. 原色日本貝類図鑑 二三〇〇円
- *25. 続原色日本貝類図鑑 二三〇〇円
- *43. 原色世界貝類図鑑（I） 一八〇〇円
- *44. 原色世界貝類図鑑（II） 二二〇〇円

✣プランクトン

- *5. 日本プランクトン図鑑 二三〇〇円
- *38. 日本淡水プランクトン図鑑 二三〇〇円
- *45. 日本海洋プランクトン図鑑 二五〇〇円

✣哺乳類その他

- *7. 原色日本哺乳類図鑑 二二〇〇円
- 41. 原色家畜家禽図鑑 一六〇〇円
- *30. 原色日本両生爬虫類図鑑 二〇〇〇円
- *8. 原色日本海岸動物図鑑 二二〇〇円

✣昆虫・クモ類

- *1. 原色日本蝶類図鑑 二〇〇〇円
- *2. 原色日本蝶類幼虫大図鑑（I） 二五〇〇円
- *3. 原色日本蝶類幼虫大図鑑（II） 二五〇〇円
- 1. 原色台湾蝶類大図鑑 二八〇〇円
- *2. 原色日本昆虫図鑑（上） 二三〇〇円
- *3. 原色日本昆虫図鑑（下） 二〇〇〇円
- *21. 原色日本蛾類図鑑（上） 二四〇〇円
- *22. 原色日本蛾類図鑑（下） 二四〇〇円
- *46. 原色日本蛾類幼虫図鑑（上） 二三〇〇円
- 47. 原色日本蛾類幼虫図鑑（下） 二三〇〇円
- 4. 原色日本蜘蛛類大図鑑 二四〇〇円
- 原色日本昆虫生態図鑑 ①カミキリ編 二三〇〇円 ②トンボ編 二三〇〇円

✣鳥類

- *6. 原色日本鳥類図鑑 二三〇〇円
- *6. 原色日本野鳥生態図鑑（I） 山野の鳥 二四〇〇円
- *7. 原色日本野鳥生態図鑑（II） 水辺の鳥 二四〇〇円
- *8. 原色飼鳥大図鑑 二五〇〇円

標準原色図鑑全集

■ご要望にこたえ……

第二期刊行（☆は既刊）
（予約特価 各 一二〇〇円）
〈定価 一二〇〇円〉

- ☆11) 高山植物
- ☆12) 温室植物
- 13) 有用植物
- ☆14) 菌類（きのこ・かび）
- ☆15) 海藻・海浜植物
- 16) 海岸動物
- ☆17) 熱帯魚・金魚
- ☆18) 飼鳥・家畜

第一期（既刊）（定価 各 一二〇〇円）

〈全12冊の内容〉

- 1) 蝶・蛾
- 2) 昆虫
- 3) 貝
- 4) 魚
- 5) 鳥
- 6) 岩石鉱物
- 7) 園芸植物
- 8) 樹木
- 9) 植物 I
- 10) 植物 II
- 別巻) 動物 I
- 別巻) 動物 II